

## No.61 (目次)

01. 西田幾多郎における「人格」  
布施圭司
02. Implications of AI, Applications, and Translation Software Usage on the English Ability of Japanese EFL Students  
McPhail, Sean Andrew Elton
03. ジュニアドクター育成塾を活用した児童生徒への工学教育に関する取り組み  
藤田 剛、権田 岳、梗間 由幸 ほか
04. 【翻刻】類題稲葉集 恋部  
渡邊 健

# 西田幾多郎における「人格」

## －「点から点へ」動くもの、「矛盾的自己同一」的なもの<sup>\*</sup>

‘Personality’ in Nishida Kitaro’s thought -entity in move ‘from point to point’, in ‘contradictory self-identity’

布施 圭司<sup>\*\*</sup>  
Keiji FUSE

### 概要

西田幾多郎の思想において「人格」は様々に語られている。通常は人格の特徴として「理性」が挙げられることが多いだろうが、西田では単に理性が否定されるのではないものの、非合理的な側面も見て取られている。また、カントの「目的の王国」を度々引き合いに出し、人格は「目的そのもの」であり、人格同士は互いを目的とし合う関係にあると西田は主張し、いわゆる「私と汝」として自他の関係を論じている。しかし、「私と汝」は「非連続の連続」の関係にあり、互いを目的し合うとも言えるのだが、私が汝になり汝が私になる、自他の相互変換の相が視野に収められている。論理的な規定としては、人格は「真の個物」とされている。また、物や動物も人格となる場合があるように受け取れる叙述があつたりする。小論では、西田における多様な「人格」に関する叙述を概観し、その特徴を考察したい。

#### 1 はじめに

西田幾多郎の思想において「人格」は様々に語られている。通常は人格の特徴として「理性」が挙げられることが多いだろうが、西田では単に理性が否定されるのではないものの、「我々の人格的統一の底には深い非合理的なるものがある」(六 268)と言われ、非合理的な側面も見て取られている。また、カントを度々引き合いに出し、人格は「目的そのもの」であり、自他は互いに目的とし合う関係にあると西田は度々主張し、いわゆる「私と汝」として自他の関係を論じている。しかし、「私と汝」は「非連続の連続」<sup>1</sup>の関係にあり、互いを目的とするとも言えるのだが、私が汝になり汝が私になる、自他の相互変換の相が視野に収められている。論理的な規定としては、人格は「真の個物」とされている。また、物や動物も人格となる場合があるように受け取れる叙述があつたりする。小論では、西田における多様な「人格」に関する叙述を概観し、その特徴を考察したい。

西田の用語は、日常的に使われる言葉でも、独特な意味

が込められていることが多い。「人格」も同様であり、例えば、「私の社会的・歴史的限定というものも、人格的限定というものも、一般に考えられる意味と同一ではない」(六 10)と言われたりする。また、思想の中で様々な契機を論ずる中で「人格」に言及されており、焦点の当て方は多様なので、簡略な理解は難しい面がある。小論では、多様に語られる「人格」の諸相を概観し、思想の中での展開を鑑みつつ、統合的に理解することを試みたい。

2 で参考になる先行研究を参照し、3 で西田の思想における「人格」主な規定を概観し、4 で様々な規定の総合的な理解を試み、西田における「人格」の特徴を考察したい。

#### 2 西田における「人格」に関して参考になる先行研究

西田における「人格」に関して、特に参考になる三人の研究者の所説を参照したい。各々において、「人格」は西田における他の主要な問題が論じられる中で言及されている。

\* 原稿受理 令和8年1月30日

\*\* 教養教育部門

(1) 真の「個物」としての「人格」

小坂国継は、『西田幾多郎—その思想と現代』（ミネルヴァ書房、1995年）において、西田における「個物」、そして「個物」と「人格」の関係について、手際よく整理している。

まず、「個物」に関して、西田において「個物」は、一般者との関係、他の個物の関係、という二側面から考えられている。小坂はこれを個物の「二重構造」（同書300頁）と言い表している。前者について、個物が自己限定することは、一般者が自己限定することでもあり、逆に一般者が自己限定することは、個物が自己限定するという、相互包摂である、と小坂は言う。後者について、小坂によれば西田は前者ほどはっきりと語っていないが、特に強調されるのは、個物と個物は相互に限定し合っており、その相互限定が一般の自己限定でもあることである。「個物は相互に限定しあい、また相互に限定しあうことによって不断に世界（一般者）を創造している。そしてそれがまた世界が世界自身を限定する（一般者の自己限定）ということなのである」（同書300頁）。西田哲学における個物の、対一般、対他の個物という「二重構造」は、多くの研究者が指摘しているが、小坂の分析は明快で参考になる。

次に、「個物」と「人格」の関係であるが、小坂は、西田における個物を「有るもの」、「働くもの」、「行為するもの」という三つの段階あるいは種類で理解する。異なった個物が存在するのではなく、この三つは、個物の場所的自覚の深まりの三つの段階である。この三つは、物質的存在、生物的存在、人間的存在と言え、最深層の世界、絶対無の自覚的世界においてある個物が真の意味の個物、「人格的自己」である。「したがって、西田のいう人格的自己は、通常の用法とは異なった意味で用いられていることに注意しなければならない。それは日常的レヴェルにおけるわれわれの自己を指しているのではなく、世界の最深層にある「絶対無」に直接している自己すなわち真正の自己を指しているのである。いいかえれば、日常的な自己を突き破り、その底の底に徹底したものである。いわゆる「平常底」における自己である。そしてわれわれはこのような人格的自己となることによって、真に創造的世界の創造的要素あるいは射影点となることができるのである」（同書302頁）と小坂は述べる。

そして小坂は、真の個物である人格的自己は、いわば「絶対無の自覚的自己限定面」であるとして、「それは絶対無が絶対無において絶対無自身を見たもの、つまり絶対無の内容である」（同書302頁）と述べる。そして「人格」は、一般者の自己限定の極限に考えられるが、単に一般者によって限定されるのみでなく、自己自身を限定し、そのことによって一般者を限定するものである。そして

個物の自己限定は、先にもあった様に、個物同士の相互限定を通して行われる。

この個物と個物の相互限定を、小坂は「私と汝」の相互承認として論じており、妥当と言えよう。「私」と「汝」はそれぞれの自己の表層で結びついているのではなく、その最深層において結びついているのである。すなわち絶対無において、あるいは絶対無を媒介して、相互に行為をとおして応答しあっているのである」（同書304頁）。逆に言えば、行為的自己を動かすような他者は、必ずしも人間的存在でなく、法律も道徳も過去も「汝」という人格的意味をもっていると小坂は言う。

西田の「個物」概念の問題点として、個物と一般者の関係において一般者（絶対無）に力点が置かれ、一般者の自己限定から個物が考えられていることを、小坂は指摘する。「西田において、一般者を個物の側から、個物の行為をとおして見るという観点がないわけではない。しかし全体として見れば、このような観点はきわめて稀薄であり、またその内容も具体性に欠けている」（同書305頁）。人格の行為としては「私と汝」の愛の関係が『無の自覚的限定』（1932）などで詳論されているが、その行為と一般の関係は必ずしも明確とは言えないと思われる。そこで、小坂の指摘は同意できるものであろう。

## (2) 「絶対者」の自己否定と「人格」

竹村牧男は『西田幾多郎と仏教 禅と真宗の根底を究める』（大東出版社、2002年、第二刷、2007年）において、西田の最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」（1946）に見られる、自己の成立に関する西田の思想を明確化している。竹村の考察は、西田における「絶対者」と自己（人格）の関係について示唆深い。

「西田は、自己の成立に関して、神自身または絶対者そのもののあり方の論理的構造そのものから説きおこす。絶対的なものの論理的構造を厳密に究明しぬく中で、自己と世界の成立の事をも解明するのである。西田は、その絶対的なものは、絶対の自己否定を本質とすべきことを鋭く論じている」（同書117頁）。竹村によれば、絶対者は、自己肯定のみならず自己否定を含み、しかもそれは自己を否定し尽くす絶対無であり、それ故に、相対的な個物を成立させ、その個物において自己をもつ。

竹村は、我々が自己のあり方に不安を持ち、探求するのは、そもそも自己の成立が自己によってではなく絶対者によっているからであると論じている。そうであるなら、自己存在による絶対者の追求そのものが、絶対者の働きによるものであるから、「宗教心は、決して自己から

起こすものではない。神の呼び声、神の力によってもたらされる恩寵である。しかしてこの宗教心は、おのづから、自己は自己を超えたものにおいて自己をもつという、その自己の根源に徹することに導いていくのである」（同書 120 頁）と竹村は述べる。

そして竹村によれば、「西田の本論文「場所的論理と宗教的世界観」の主旨は、対象論理ではなく場所的論理において宗教の事理を明かすということとともに、そこに宗教的人格の成立を見出し、それをさらに歴史的現実世界に結びつけるということになる。すなわち、宗教的実存は直ちに歴史形成的・社会的実存であるという事柄を明かすことにある」（同書 133 頁）。

また、鈴木大拙の「即非の論理」をめぐる大拙と西田の交流を、書簡のやりとりから読み解いており、興味深い。それによれば、大拙の『日本的靈性』（1944 年 12 月刊）で説かれた「即非の論理」は、西田の「場所的論理と宗教的世界観」（1946 年の『哲学論文集 第七』で公刊。日記の叙述では、1945 年 2 月 4 日から執筆され、4 月 14 日一先ず脱稿）の成立に、大きな影響を与えている。西田は、大拙の「即非の論理」を、自らの主張する、「矛盾的自己同一」、「逆対応」の論理に対応するものとして考えていた。竹村によれば、「即非の論理」は、対象論理ではなく、自己否定に於て自己を持つ「矛盾的自己同一」であり、「心と仏」（個と全）は「矛盾的自己同一」である。そしてこの論理は、絶対現在の自己限定として「平常底」（ここでは詳論できない。特殊な神秘的経験ではない、日常の現実そのものと受け取っておく）における、個人が個人に徹底すればするほど絶対者に接する「逆対応」の論理である<sup>2</sup>。

西田の大拙宛の手紙の一つにある、「大体従来の対象論理の見方では宗教というものは考えられず、私の矛盾的自己同一の論理即ち即非の論理でなければならぬと云うことを明にしたいと思うのです。私は即非の般若的立場から人というものが即ち人格を出したいとおもうのです。そしてそれを現実の歴史的世界と結合したいと思うのです」（1945 年 3 月 11 日付、十九 399）という記述を竹村は引く。他に 2、3 の西田の大拙宛の書簡を参照した後、竹村は述べる。「寸心 [西田]<sup>3</sup>の関心は、どこまでも、個＝主体にあったことが知られる。宗教の深みから、個の成立を見届けて、さらにそれを「現実の歴史的世界に結合したい」、すなわち、歴史的創造の主体として打ち出したいというのが、哲学者・寸心の、時代の「もの」<sup>4</sup>となつての課題であつた」（竹村前掲書 150 頁）。

### (3) 自覚的行為と「人格的統一」

氣多雅子は、『西田幾多郎 生成する論理—生死をめぐる哲学』（慶応義塾大学出版会、2020 年）において、西田における「個人的自己」のあり方を深く論じ、自覚的行為の基底として「人格的統一」を捉えている。氣多によれば、西田は「個物」の典型を「個人的自己」と考えており、世界において行為によって自己自身を実現していく実践的主体としての個人的自己が「人格」である。

そして、氣多は、我々に対する「實在」の意味を考察している。物体であれ、人間であれ、組織体であれ、我々の行動に抵抗するもの、我々を限定する意味をもったものが、「實在」であり、その限定は我々の底において私たちを否定するということである。そのような我々を否定する「實在」の世界にあって、「自己の中に矛盾を孕みつつ「人格的統一」をもつものが「真の個物」」（同書 181 頁）である。

氣多は、「人格的統一に関する西田の叙述は微妙である」（同書 181 頁）、「西田は人格的統一を個人的自己の内面的統一に限定していないように思われる」（同書 181 頁）と述べる。私が他人から内面的に動かされることもあり、逆に他人が私から動かされることもあり、個人的自己同士の間にも人格的統一が成立すると、西田は考えていると思われる。私が他人から道徳的示唆を受けて内面的に動かされることは可能であり、逆に他人が私によって動かされることもあり得ることから、私と他人との間に人格的統一が成立することも考えられる。さらに「統一成立の自由さは、私と汝との関係をさらに物に対しても認めることに現れている」（同書 181 頁）。氣多は、「具体的世界に於ては、物と物との間に私と汝という関係がなければならぬ。（中略）我々の自己が絶対の否定即肯定面に於てあるものとして、絶対否定を隔てて相見する時、私に対するものは、山も、川も、石も、すべて汝の意味を有つのである」（七 59）という西田の言葉を引き、「私と汝の関係が成り立つのは、対峙する相手が人か物かによるのではなく、絶対否定を介して向かい合っているか否かによる」（同書 182 頁）と述べている。氣多は、西田の人格概念が、普通に考えられる個人的自己を超えて、深さと広がりがあることを浮き彫りにしている。絶対否定を介して向かい合っている「私と汝」の関係に立つものが、人格同士であるという指摘は的確と思われる。この指摘から、我々は、無を介した自他の向かい合いを、「人格的統一」と理解してよいのではないだろうか。

氣多は、西田の「人格」概念の問題点も指摘している。「[歴史的世界の形成を言い表わした]「作られたものか

ら作るものへ」という考え方になると、工作物も創造的生命の現れとして汝の意味をもつと解される。しかし、人格的自己を「通常の時間観念である」直線的時に於ける持続的で堅固な個として成立させないこの考え方は、同時に、揺るぎない責任の主体を成立させることが難しいという弱点をもつと言うべきであろう（同書 182 頁）。確かに、世界の形成として人格の成立を捉えると、人格的主体の行為の責任を究極的には主体に帰すことはできなくなるので、氣多の懸念は妥当と思われる。

「人格的統一が個物を個物たらしめるとはどういうことか。それは、人格的統一があつて初めて、自己が自己を限定するということが成り立つからである。自己が自己自身を限定するということは行為において自覚的だということである。具体的な個物の個物性は、それが自己自身を限定するものだということにある」（同書 182 頁）と氣多は述べる。無を介した自他の向かい合いがあつて初めて、個の自覚が生じ、自覚的行為が可能になり、個物が成立する。個物成立に対する、自覚的行為の重要さの指摘は傾聴すべきと思われる。

#### (4) 人格同士の関係、人格と絶対者の関係のさらなる明確化の必要性

これらの先行研究から、西田は「人格」を、自他の無を介しての向かい合いという根底的な深層から捉えようとしていること、そこでは、人格同士、及び人格（個物、自己）と絶対者（世界、神）は、それぞれ相互限定の関係にあること、が理解される。我々は、さらに人格同士の関係、人格と絶対者の関係を明確化して行くべきであろう。小論では、西田における「人格」の様々な規定を考察し、その課題を遂行したい。

その上で、小論では扱えないが、人間存在の宗教的と言うべき根底的な深層と日常の関係について、より明確化が求められるであろう。西田の構想では、竹村の言うように、根底的な深層が「歴史的な現実世界」、即ち世俗的社会、倫理・道徳、日常生活、の成立の基盤でもあることを示そうとしたと考えられる。しかし、根底的な深層と日常世界の関係は、十分明らかとは言えないので、小坂が問題視した、個物の行為の具体性の欠如や、氣多が懸念を提示する、人間的主体の行為の責任の曖昧化を招いていると言えるだろう。こちらは、小論の考察を踏まえつつ、機会を改め取り組みたい。

### 3 西田における「人格」の主な規定

「人格」の規定として、西田の諸著作を通して概ね一貫しているのは「愛」であり、人格同士は互いに「目的」とするという記述もよく見られる。人格同士の関係は、具体的には、いわゆる「私と汝」として論じられる。また、抽象的・形式的な理性は不十分とされるが、人格には理性的側面も必要とされる。人格は論理的には、真の「個物」と規定されている。「個物」は、「一般」の対概念であり、「独立・自由」と言える。さらに、人格は度々「円」に喩えられている。詳しくはこれから見るが、それぞれ通常の意味とは異なる面（西田からすれば、本来の意味ということになる）があることに触れておくと、理性といっても抽象的・形式的に法則を把握する能力ではないし、愛といっても固定的な自他の相互承認・相互目的の関係ではないし、自由といっても単なる恣意ではない。

#### (1) 実在（神、世界）の働きの現れとしての理性

西田は度々、人格は、単に理性的存在ではないが、単に非合理的存在でもないことを主張している。最初の著作『善の研究』（1911）では、実在や神の「統一力」の現れとしての「理性」に従うことは、人格の要求であり実現である「善」であるが、その統一力との関係から切り離された場合、理性は形式的な法則性になり、無内容になるとされている。『善の研究』の叙述をいくつか見ておこう。

「理性の法則というのは観念と観念との間の最も一般的な且つ最も根本的な関係を言い現わした者で、観念活動を支配する最上の法則である。そこで又理性という者が我々の精神を支配すべき根本的能力で、理性の満足が我々の最上の善である。」（一 149f）

「我々が理性に従うというのも、つまり此深遠なる〔、実在の根本である〕統一力に従うの意に外ならない。然らずして抽象的に考えた単に理性というものは、嘗て合理説を評した處に述べたように、何らの内容なき形式的関係を与えるにすぎないのである。」（一 150）

「実在の論に述べた様に意識現象が唯一の実在であるとすれば、我々の人格とは直に宇宙統一力の発動である。即ち物心の別を打破せる唯一実在が事情に応じ或特殊なる形において現われたものである。」（一 152）（冒頭の「実

在の論」は『善の研究』第二編「實在」であろう。この言は、第三編「善」のものである。）

「凡そ我々の精神活動の根柢には一つの統一力が働いて居る、これを我々の自己といい又人格ともいうのである。」  
(一 177)

「精神現象とは所謂知情意の作用であって、之を支配する者は亦知情意の法則でなければならぬ。而して精神は単に此等の作用の集合ではなく、その背後に一の統一力があって、此等の現象はその発現である。今此統一力を人格と名づくるならば、神は宇宙の根柢たる一大人格であるといわねばならぬ。」(一 182)

これらの引用から、理性が實在(神)の作用として捉えられ、個人の人格は、その時々の実在の作用の現れとされていると言えよう。そして各々の人格は個性をもっているとされるところが、カント的な理性と異なると言えよう<sup>5</sup>。實在から切り離された理性は、抽象化・普遍化した合法則的性と見されていると言えよう。西田の理性に関する考え方は、用語の変遷はあるものの、基本的には晩年まで変わらないと思われる。

實在(神)の「統一」のあり方、抽象的・形式的ではない、現実的・具体的な「個人性」のあり方、が明確化されるべきであろう。神の統一力と個人の単なる一致という主張ならば、自己存在が融解する神秘的融合ではないかという疑念が生ずる<sup>6</sup>。この問題は、『善の研究』では、充分には論究されず、思想の展開の中で論じられていくと考えられる。

「人格」や「統一力」に関連して、その後の思想につながる叙述を引用しておきたい。

「更に進んで考える時は、自然と精神とは全然没交渉の者ではない、彼此密接の関係がある。我々は此二者の統一を考えずには居られない、即ち此二者の根柢に更に大なる唯一の統一力がなければならぬ。哲学も科学も皆此統一を認めない者はないのである。而して此統一が即ち神である。」(一 179)

自然と精神の統一ということは、後の「空間的・円環的・一・全体・作られる・粒子」と「時間的・直線的・多・個物・作る・波動」との「矛盾的自己同一」<sup>7</sup>を彷彿させる。「余は道徳的社会と純粹空間とは同一の根柢を有ったものとする」と(二 211)という言葉もあるように、西田には、自然・物体の世界と道徳・行為の世界を統一的に把

握しようとする根本的傾向があると思われる。

次に、最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」(1946)の叙述を見よう。

「世界の自己表現的形成の内容が理性的と考えられるものである。此外に理性と云うものがあるのではない。単に形式論理に当嵌まるものが理性的と云うのではない。」  
(十一 311)

この引用の「世界」は、先の『善の研究』からの引用にあった「實在(神)」に該当すると言える。「自己表現的形成」は「自己限定」<sup>8</sup>と言い換えてよいであろう。「単に形式論理に当てはまるもの」は、単に合法則的なものであり、世界の自己限定から抽象されたものと言えよう。

「実践的自己とは、単なる理性ではない。法を破る可能性を有つ所に、自己があるのである。我々の自己の意志的存在、人格的自己と云うのは、何処までも自己矛盾的存在でなければならない。我々の自己は、何処までも述語面的〔一般的〕自己限定としての有である。自己に於て自己を限定する、自覚的である。何処までも理性的である。併し単に斯く考えられるかぎり、自己は意志的でない、行為的でない。(中略)我々の自己は意識的に作用する。併し我々の自己は単に意識の内にあるのでもない。無論単に外にあるのでもない。内と外との矛盾的自己同一的に、何処までも自己に於て世界を表現すると共に、世界の一焦点として自己自身を限定する所に、即ち創造的なる所に、自由なると共に内的に必然的なる、我々の人格的自己があるのである。」(十一 401f)

この引用では、我々の自己が、理性的な面もあるが、理性を逸脱する面もある、矛盾的存在であることが述べられている。『善の研究』より明確に人格の矛盾が語られている。

「述語面的」は、ここでは簡単に「一般的」と解しておく。理性的意識で把握される一般概念による規定によって、我々は自分のあり様を自覚する。そのあり様は、既にある特徴である。しかし、我々は「意志」によって現存しないものへと向かう。その意味では、自己存在は一般的な規定を超出している。そのような我々の「自己」は、概念的な規定では把握されない個人的「実存」を想起すれば近いであろう。実存は自己を超えたものに関わるというのは、キェルケゴール以来、実存思想が主張してきたことであった。その関わりが、ここでは「意志」とされていると考えたい。とは言え、単に意識外のもの

は、非合理的なもので、理解できないし、自己と見なしようがない。従って、絶えず理性による概念的な把握へと収斂・固定化（内化、意識化、必然化とも言えよう）することも必要である。概念化の必要性は、実存思想では重要視されない傾向があると言えよう。理性と意志を合わせ持つ我々の自己が、この引用では「内と外」の「矛盾的自己同一」として語られていると言えよう。「自己に於て世界を表現」、「世界の一焦点として自己自身を限定」は共に、「自由なると共に内的に必然」な「我々の人格的自己」の「矛盾的自己同一」を言っていると思われる。

次の二つの言葉は、内容的には同じく、一般・必然・理性と自己（個物）・自由・非合理との矛盾的自己同一を語っているのだが、印象的なので紹介したい。

「個が何処までも一般を否定する所に、我々の自己が何処までも法を破る可能性を有する所に、我々の自己の存在があるのである。単に一般者的方向に行くことは、却って自己の自由を否定することである、自己自身を失うことである。（中略）而も又単に一般を否定する所に、理性を否定する所に、自己があるのである。単に非合理的なるものは、動物に過ぎない。我々の自己と云うものは、考えれば考える程、自己矛盾的存在であるのである。」（十一 413）

「我々の自己は、動物的でもなければ、天使的でもない。此故に我々は迷える自己である。一転してその矛盾的自己同一に於て安住の地を見出すのである。」（十一 419）

## (2) 人格同士の関係 愛、「私と汝」

西田は『善の研究』（1911）から、人格と人格の関係を「愛」として論じている。

「他の人格を認めるということは即ち自己の人格を認めるということである、而してかく各が相互に人格を認めたる関係は即ち愛であって、一方より見れば両人格の合一である。愛において二つの人格が互に相尊重し相独立しながらも合一して一人格を形成するのである。かく考えれば神は無限の愛なるが故に、凡ての人格を包含すると共に凡ての人格の独立を認めることができる。」（一 194）

人格同士が互いに人格と認めること、相互承認が愛であることが述べられている。また神は無限の愛であり、全ての人格を愛し、人格として認めること、が述べられている。

この叙述からは、自他の単なる合一が主張されると受け取れてしまう。また、神の愛と個々の人格の関係も静的な印象を受ける。人格同士の関係についての西田独特な考えは、十分には表れていないと言えよう。

『善の研究』から、もう一つ引用しておきたい。

「余の考を以て見ると、普通の知とは非人格的対象の知識である。たとい対象が人格的であっても、之を非人格的として見た時の知識である。之に反し、愛とは人格的対象の知識である、たとい対象が非人格的であってもこれを人格的として見た時の知識である。両者の差は精神作用其者にあるのではなく、寧ろ対象の種類に由るといってよろしい。而して古来幾多の学者哲人のいった様に、宇宙實在の本体は人格的の者であるとする、愛は實在の本体を捕捉する力である。物の最も深き知識である。」（一 198f）

西田の言う人格に関しては、2 (1)、2 (3) で見たように、人間以外にも人格と見なされる場合があることが指摘されている。この引用でも、「対象の種類」によると言っている。その前に、「人格的として見た時の」とあるので「対象の見方の種類」と言った方がよいであろう。そして、宇宙實在の本体は、人格的なもので、それを把握するのは「愛」だと言われている。これまで見てきたように、『善の研究』では、宇宙實在の本体は大なる人格である神とされている。それを捕捉するのは、「信仰」（「信心」）とされることも多いと思われるが、ここではこの問題は扱えない。<sup>10</sup>

では次に『無の自覚的限定』における人格と人格、「私と汝」の愛について検討しよう。同書は、「非連続の連続」という概念が導入された点が、大きな特徴であり、人格と人格の関係も、「非連続の連続」である。同書では、「人格」に関する叙述が非常に多い。「私は汝を認めることによって物を離れて自由なる人格となるのである。唯、一つの人格というものはない、かかるものを考えるのは人格がないと云うに等しい」（六 330f）などと言われ、人格は他の人格に対してのみ人格であるとされている。この考え方は、例えばヤスパースも「実存は実存に対してのみ実存である」としており、西田独特という訳ではない。少し後で述べる人格同士の相互変換が見られるところが西田の特徴と言える。

「私は一つの人格というものを考えるには、カントの所謂目的の王国という如き考から出立すべきであると思う。他を目的自体と認めることによって自己が目的自体とな

る、即ち人格となるのである。(中略) 私の一つの行動が或一般的なるものの限定として考えられることによって、私の人格的統一というものが考えられるのではなく、一つの瞬間に於て私が絶対自由として、他の瞬間に於ける私を絶対自由と見做すことによって、私の人格的統一というものが成立するのである、即ち非連続の連続として人格的統一というものが成立するのである。併し此の如き目的の王国の考は人格と人格との対立的関係を明にするものであるが、未だその結合の意義を明にしたものではない。かかる関係に内容を与え之をして現実的ならしめるものは何であるか。私はそこにキリスト教的愛、即ちアガペという如きものを考えたいと思う。汝の隣人を汝自身の如く愛せよというキリスト教的愛は、絶対に分離せるものの結合でなければならぬ。」(六 318f)

この引用では、カントの「目的の王国」は、各々の人格が一個の目的であり、独立であることの援用として用いられている。「目的の王国」は互いを目的とする共同体なので、結合の意味も含まれていると思われるが、「人格一般」の理念の下での同一性による結合と言えよう。その見方では、それぞれの人格は「一般的なるものの限定」となる。そうではなく異なる人格の結合は、引用の10-14行目で言われるように、「目的の王国」では明かではないと言えよう。

そして、「一つの行動が或一般的なるものの限定」であることが人格的統一、言い換えれば、人格成立の根拠ではなく、ある瞬間と他の瞬間の結合、つまり、人格と人格の結合(統一)、言い換えれば、「非連続の連続」が、人格を成立させるとされている。この点は、次の3(3)における、「非連続の連続」、「動く個物」についての考察で、より明確になるとと思われる。

さて、人格同士の結合は何かというと、「愛」であるとされている。『無の自覚的限定』では、「自愛と他愛及び弁証法」という論文があるなど、「愛」についても詳細に論じられている。この引用では、アガペーというキリスト教的愛が人格の結合として挙げられている。西田は、アガペーは、「非連続の連続」、「絶対に分離せるものの結合」としている。

「私と汝」の「非連続の連続」については、別の論文<sup>11</sup>で論じたので、ここでは詳論せず、要点を述べたい。

「私と汝」の関係は、互いが単に一となるのではなく、私が汝となり、汝が私となる、相互変換と考えられる。ここでは、私が自己否定・無化して汝となる、汝が自己否定・無化して私となるという自己無化が働いている。自己否定の究極は死であり、「真に個物的なるものは死するこ

とによって生きるものでなければならない」(六 8)、「死は永遠の生である」(六 246)と言われている。具体的には、田邊元の言うような「実存協同」<sup>12</sup>、自己が既に死んだ他者となる関係、と思われる。(これは決して特殊な神秘的な事態ではなく、奇をてらう言い回しでもなく、例えば、伝統や遺志を継ぐということで、むしろ普通な人間のあり方と言えるのではないか。)

### (3) 真の個物 独立・自由

『善の研究』(1911)では、「個物」に関する論究はないが<sup>13</sup>、少し後で言及する「独立」や「自由」という「個物」の基本的規定が、「人格」の形容として使われることはある。「個物」は、『働くものから見るものへ』(1927)で、アリストテレスの「主語となって述語とならないもの」として、『一般者の自覚的体系』(1930)で、「表現的一般者の自己限定」として、『無の自覚的限定』(1932)では、「無の一般者の自己限定」、「人格的自己」、他の個物(人格)との関係(「私と汝」)にあるもの、として論じられている。また、『哲学の根本問題 続編(弁証法的世界)』(1934)からは、個物は「歴史的世界」において「ポイエシス」(制作)するものとして思索が深められてゆく。

「人格」、「自己」、「個物」に関しては、直接的には、「真の個物というべき我々の個人的自己」(六 333)、「我々の人格的自己と考えられるものこそ真の個物」(七 183)、「真の個物というべき我々の自己」(七 306)、といった言がある。他にも、内容的に「人格」や「自己」は「真の個物」であると受け取れる箇所は多い。

「個物」は「一般」の対概念であり、一般化されないもの、つまり「概念」によって把握されないもの、「主語となって述語とならない」ものである。西田の考えでは、様々な概念で規定される個物は、静的な「対象存在」であり、現実の個物が抽象化されたものである。西田が問題とするのは、現実の個物、現実の世界において「働く」(行為する)ものである。

そして西田の考えでは、個物は自覚的に行為するものである。他の作用で動くだけでは働くことにならない。我々が、他から動かされるのではなく、自らの意志で行為する時は、自分がそれをなすべきという意識があり、言い換えれば、自分の自覚を伴って行為するので、西田の考えは承認できよう。そして、「我々の個人的自覚は製作より起るのである」(九 153)という言があり、働くことが自覚でもあると言えよう。あくまで一例だが、夏目漱石の「私は小説家である」という自覚があったとする

と、小説を書かなければ（働かなければ）、その自覚は成立しない。

自ら働くということは、「独立・自由」ということであり、自ら働くものの典型が人格、むしろ、真に自ら働くのは人格のみ、と言ってよいと思われる。

「独立・自由」は、通常でも「個物」の基本的規定と言えよう。しかし、普段深く反省されずに使われている「独立・自由」の意味を、西田は究極まで突き詰め、独特の見方を示す。大きく見れば、一般との関係、そして、他の個物との関係が問題である（2（1）で見たように、小坂国継は「二重構造」と呼んでいる）。一般によって限定される（具体的には、世界や神から規定を受ける）という契機もやはり個物は有しており、一般から限定を受けつつ（非独立・非自由でありつつ）、独立・自由とはどのようなことなのか。そして、現実の個物は一つだけで存在しているのではなく、他の個物と共にある（このことは、3（2）で触れた、人格は他の人格と共にあるということと、符合する）。従って、他の個物からやはり限定を受ける（非独立・非自由である）にも関わらず、独立・自由とはどのようなことなのか。

真の個物としての「人格」に関して、「非連続の連続」<sup>14</sup>が導入され、人格同士の関係が「私と汝」として本格的に論じられるようになる『無の自覚的限定』（1932）と、「人間的存在」、「歴史的世界に於ての個物の立場」という二つの論文が収録されている『哲学論文集 第三』（1939）から、いくつか叙述を検討したい。

まず『無の自覚的限定』から引用する。

「我々の自覚的過程の一步一步が絶対の自由でなければならぬ、非連続の連続が真の人格的統一と考えられるものである。」（六 289）

自己が自分を知る自覚は、非連続（独立の自由）の連続として一瞬一瞬の行為によって、自分が何かになる、ということだが、その自由から自由の歩みが、人格を成立させる。「人格」は「自由」であるという規定は、通常にも言われることで難点はないであろう。

注意せねばならないのは、個々の一瞬（自由）というよりも、一瞬一瞬（非連続）の連続が、人格的統一、と言われていることである。自由から自由へ（「点から点へ」、「現在から現在へ」という運動が、人格を成立させる、と受け取れるのではないか。その運動は、世界（神）が引き起こすのであり、つまり、世界の自己限定と言えよう。

「個物が動く個物として点から点に移るには、個物は自

己自身を破壊せねばならぬ。（中略）個物と考えられるものは対象化された自己であるかぎり、それは自己自身を破壊するものでなければならぬ、自己自身を破壊することによってそれが真の個物であり得るのである。個物は破壊されるべく有るのである。（中略）而して斯く個物が破壊されるというには、その根柢に否定から否定に移る自由意志がなければならぬ、根本悪がなければならぬ。

（中略）併し死することは生きることであり愛の立場に於て、破壊された個物は動く個物として生きるのである。根本悪は唯、神の絶対愛によってのみ救われるのである。斯く愛によって包まれるかぎり、自己というものが見られるのである、我々は唯、神の愛の中のみ自己を見るのである。個物は固、破壊されるべくあり、点から点へ移るべくあるのであるという意味に於ては、自己は一般によって限定されるべくあるのである、罪は悔い改められるべくあるのである。」（六 294f）

「動く個物」は、個物が一つのあり様から別のあり様に移ること、個物が「点から点へ」と運動することを言わんとしていると考えたい。3（3）の冒頭で、個物は「独立・自由」であり、自覚的に「働く」という規定を見たが、一瞬一瞬が「独立・自由」（非連続）であり、新たなあり方が連続して行く。一つのあり方は成立すると固定化され、「対象化された自己」となる。自由な個物は一つのあり方に止まらないのであり、「自己自身を破壊する」と言える。

そして、常に新たなあり方を求め、自己破壊を続ける意志が、「否定から否定へ移る自由意志」、「根本悪」とされているのではないか。自由は世界における「制作」<sup>15</sup>でもあるのだが、破壊のみに着目すると「根本悪」と言えるのではないか。

「愛の立場」、「神の絶対愛」は連続運動を成立させる働きと考えてよいではないか。一つのあり方が破壊されても、別のありかたへと「点から点へ」と飛躍的に（非連続に）連続運動できるのは、それぞれのあり方も一般（世界、神）の自己限定だが、継続的にそれぞれを成立させる、つまり連続運動を成立させるのが、一般の自己限定であるからであろう。「包む」ということは、それぞれの「点」および「点から点へ」の運動を、その内で成立させるということと思われる。そして、一般の自己限定を感得することが「悔い改め」と呼ばれていると考えてよいのではないか。

新たな点は、対象的に同じ自己だとしても、古い点は破壊されているので、新しい自己ないし汝としての自己と言えよう。もしくは対象的な意味で自己以外の別のも

の(人間でも物でも)かも知れないが、それは自己でもあるのが、3(2)で見た「私と汝」の関係であった。そのように自己を汝となるものと見なせば、「死することは生きること」と言ってよいであろう。

この人格と絶対者の関係は、一つ前の引用に関する考察で述べた、「他において自己を見る」(外に神を見る)と「自己において他を見る」(内に神の働きを見る)の弁証法的関係の内、後者を個物の自己破壊という契機によって語ったものと言えよう。

「罪」や「根本悪」に関しては、この引用の解釈だけでなく、別の要素も踏まえ詳細に論ずるべきであり、小論では扱えない。

「環境が個物を限定し逆に個物が環境を限定するという弁証法的運動に於て真の個物というものが考えられる如く、我々が自己に於て絶対の他を見、逆に絶対の他に於て自己を見ると考えられることによって、我々の真の人格的自己というものが考えられるのである。単に他に於て自己を見ると考えるならば、我と物と選ぶ所はない。神は何処までも我々の底から働くものでなければならない。外から働くものは盲目的力に過ぎない。我々は我々の底に超越を見るのである。それは矛盾であるかも知れない。併し真に人格的自己と考えられるかかる弁証法的運動としてあるのである。我々が自己の内に絶対の他を見ると考えるかぎり、そこにエロスの意義がなければならぬ。アガペの一面にエロスが含まれていなければならぬ。神は憧憬の対象とも考えられるのである。唯、我々はエロスによって神を見ようとするならば、それは全く東に行こうとして西に向かうものと云わざるを得ない。エロスによってアガペが基礎付けられるのではなく、アガペによってエロスが基礎付けられるのである。」(六 425f)

この引用では「真の個物」と「真の人格的自己」という二語が共に使われているが、同じものを指すと言えよう<sup>16</sup>。「自己に於て絶対の他を見、逆に絶対の他に於て自己を見る」ことにより真の人格的自己が成立するとされている。この事態を我々は先に3(2)の最後で、「私が汝となり、汝が私となる、相互変換」と言った。このような自他の弁証法的関係にあるものが真の人格的自己とされていると言えよう。他と、「弁証法的関係」(後の「矛盾的自己同一」)にある、という点を、人格の根本的規定と見なすことができよう。3(2)で言及した愛の関係では、「絶対の他」は他の人間である「汝」と思われるが、この引用では「神」である。

分かりづらい叙述だが、「他において自己を見る」=憧

憬=エロース=外に神を見る、「自己において他を見る」=底=アガペ=内に神の働きを見る、という対比が読み取れよう。人格と神の関係は、どちらかと言うとアガペ的契機に優位が置かれているが、エロース的契機もあるとされていると受け取れる。両者の弁証法的関係が、人格と神の関係には存する、というのが西田の見方と思われる。『無の自覚的限定』以降、「外が内、内が外」という言い方が、様々な弁証法的関係に使用されるが、この場合もその言い方を適用できると思われる<sup>17</sup>。

次に『哲学論文集 第三』から引用する。

「私の絶対矛盾の自己同一というのは、宗教家の所謂神に相当すると云ってよい。絶対矛盾の自己同一の世界に於て私と汝とが相対するのである。神はその像の如くに我々を造ったと云うが、神を媒介として私が私であり汝が汝である、我々は人格であるのである。此故に世界の自己同一の方向に絶対無限の人格を考えることもできる。併しそういうものが考えられるかぎり、それは絶対矛盾の自己同一でなくして、一つの人格でなければならない、モノダの一つでなければならない。神の人格と人間の人格とは、スピノーザの云う如く天狼星と地上の犬との如く異なったものでなければならない。他と一との絶対矛盾の自己同一の世界に於て、絶対否定の神を媒介として私と汝とが相対するのである。此故に我々は自由なる人格であるのである。世界の自己同一の方向に即ちイデア的方向に神が見られるかぎり、神は絶対の神ではなく、我々は自由の人格とは云われぬ。宗教的世界に於て始めて個人的人格というものがあるのである。」(九 120)

この引用では、まず「矛盾的自己同一」が「神」であると述べられているのが、目を引く。そして、ここでは「矛盾的自己同一」が、「私は汝、汝は私」という「私と汝」の関係として語られている。その関係にあるとき、我々は「人格」であるとされている。この関係は、「自己肯定」(私は私である)と「自己否定」(私は私でない)の矛盾的自己同一<sup>18</sup>でもあるのだが、「自己同一」としてのみ考えると、「絶対無限の人格」が想定される、と言われている。それをとりあえず無限の理性のようなものと考えておきたい。それは、内在へと「自己否定」しない、専ら超越的な神と言えよう。「自己同一」的=対象的方向では、神は理想的なイデアとなり、人間はそれと一致することが目的となり、自由はなくなる<sup>19</sup>。

本来の神は「矛盾的自己同一」的に人間の人格を成立させるのであり、「自己同一」の方向のみならず、「自己否定」(先ほど検討した個物の「自己破壊」)の方向も合

わせ持つと言えよう。神や世界から離反する自由を人間の人格は持っている。神や世界からの離反は、自らの根源（神や世界の自己限定）からの離反であり、自己否定につながる自由でもあるので、人間の人格は自己矛盾している。その意味でやはり「矛盾的自己同一」であり、神の似姿である。神は「矛盾的自己同一」自体で、人間の人格は「矛盾的自己同一」のそのつどの現れ、と捉えておく（比喩的に、あるいは一面に、本体と現象、全体と部分、理念と現実と言えるが、「無基底性」<sup>20</sup>にそうである）。人格は他になることによって自己となる自己矛盾であるが、元の自己は否定されるのであるから、人格は否定されることで、完遂するとも言える。このことは、先ほど検討した、「死することは生きることである」と言われていた、個物の「自己破壊」に関する『無の自覚的限定』の叙述と合致する。

『哲学論文集 第三』では、真の個物としての人格のあり様が、他にも叙述されているが、主な主張を記す。（関連する叙述は註で列挙する<sup>21</sup>。それらの叙述の「個物」、「我々」は何れも「人格」と見なしてよいと思われる。）

人格は世界によって作られたものだが、作られたあり方を否定して（自己否定して）、自由に行為し新たなものを創造する。自己否定しなければ、作ることはできない。この人格のあり方が「作られたものから作るものへ」と言われる。人格の「制作」（ポイエシス）は、世界（神、矛盾的自己同一）から与えられる「課題」ないし「命令」であり、世界とのつながりである。制作の内容は、行為を促す直観（「行為的直観」）によって与えられ、我々の自己のあり方そのものを問い、そこから真の「当為」が出てくる。矛盾的自己同一の世界では、人格の自己形成は、世界の自己形成であり、世界の自己形成は人格の自己形成である。

#### (4) 円の比喻

西田は、しばしば「心」や「人格」などを表わすのに「円」を使っている。『自覚に於ける直観と反省』（1917）では「経験の一体性」、『働くものから見るものへ』（1927）では「精神」、「意志」、「心」、「自覚」、「意識統一」、「我」、「場所」を、「円」に喩えている。『無の自覚的限定』（1932）では、「人格」を「円」で語る箇所が多く、また絶対者が「周辺なく到る所が中心となる無限大の円」とされ、この比喻は晩年まで使われる。（『哲学論文集 第五』（1944）では、「絶対現在」の「自己限定」が「円錐」と言われているが、今は措いておく。）

『働くものから見るものへ』で、プロティノスが心を円形運動と言ったことに言及されたり（四 154）、『無の自覚

的限定』で、パスカルが神を周辺なくして到る所に中心を有する無限大の球に喩えていることが引かれたり（六 187f）、最後の完成論文「場所的論理と宗教的世界観」（1946）では「中世哲学」（具体的には不明だが、別の箇所（『哲学論文集 第六』十一 138）からするとクザーヌスと思われる）に言及しつつ球が語られている（十一 423）。また、『哲学論文集 第六』では、「神は永遠の鏡である、大円鏡智と云うことができる」（十一 119f）という言葉がある。仏教では心ないし人間を円相で表すことがある<sup>22</sup>。西田がどこから着想を得たのか、また、これらの西田以外の「円」や「球」と西田との異同、は小論では扱えない。

『働くものから見るものへ』と『無の自覚的限定』から叙述をいくつか見よう。まず『働くものから見るものへ』から引用する。

「我々の精神は意志に始まって意志に終る。首尾相合して、一つの円を成す時、それが直観となる。」（四 44）

「自覚に於ては終が始に含まれて居る、一つの発展が元に還ることによって、自覚の意識が成立するのである。内部知覚[自己の状態についての意識、と理解しておく]というのも、かかる自覚の形に於て自己自身を知ることである。併し自覚は閉じられた一つの円形ではなく、フィヒテの事行の如く無限なる進行である。」（四 60f）

「プロチンが我々の心は円形運動をなすと云った如く、意識の統一は始となると共に終となるものでなければならぬ、原因となると共に目的となるものでなければならぬ。此円形が単なる円形であって、幾度でも同じ回転運動をするに過ぎないと考えられる時、単に自然界を見るのみであるが、この回転運動自身が螺旋状にして積極的意義を有する時、我々は意識統一の世界を見ることができるようである。」（四 154）<sup>23</sup>

先にも例として挙げたが、夏目漱石の「私は小説家である」という自覚があったとすると、「小説家 夏目漱石」という直観は、小説を書こうとする意志の元であり、実際書くことによって成就する。同じ小説を繰り返し書くのではなく、発展して行くのであるから、閉じていないと言ってよいだろう。あるものが同じ回転運動を繰り返し、新たな発展（新しい創造）がない場合、そのものは単なる物と言えよう。ここで言われる「自然界」は、他から動かされる対象的な物の世界であり、機械的世界と言えよう。

(前後して恐縮だが、三つ前の引用の続き)「併し働くものを斯く見るには、之を包む無限大の円でなければならぬ。此故に万物は、すべてを包み、何物にも包まれない一者に於て直観せられるのである。動くものを止めて見るには、自らそれ以上に動くものでなければならぬ。一者は無限に動くものを包み、之を止めて見るという意味に於て、無限の動と考えることができる。」(四 44)

「すべての経験的知識には「私に意識される」ということが伴わねばならぬ、自覚が経験的判断の述語面となるのである。普通には我という如きものも物と同じく、種々なる性質を有つ主語的統一と考えるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの点ではなくして一つの円でなければならぬ、物ではなく場所であればならぬ。」(四 279) <sup>24</sup>

以上の引用は『働くものから見るものへ』だが、同書では、論文「場所」があり、「場所」という考えが打ち出される。我々が円であるということは、正確には、意志による円運動を知る意識(「我思う」、自覚)が円ということであろう。働く意志は自覚の意識から生ずるのであり、自覚の意識は意志を成立させる場所と言えよう。これに関しても、先の、「私は小説家である」という意識(自覚)を例として挙げるができるであろう。

各々の自己と絶対者(世界、神、絶対無)の関係、及び、自己同士の関係については、『働くものから見るものへ』では、『無の自覚的限定』以降ほど、「弁証法的関係」ないし「矛盾的自己同一」は明確には語られていない(内容的に全く見られないわけではないが、用語として明確に語られるのは、「弁証法的関係」は『無の自覚的限定』からであり、「矛盾的自己同一」は『哲学論文集 第二』(1937)からである。なお、4で述べるが、両者は実質的には同じと思われる)。3(1)、3(2)で言及したが、『無の自覚的限定』で「非連続の連続」が導入されて、逆説的な叙述が本格的に語られるようになる。自己と絶対者の関係、自己同士の関係が語られている、『働くものから見るものへ』の叙述を、さらにそれぞれ一つずつ見ておこう。

「意志は、単なる運動ではない、単なる変化ではない、終が始に含まれて居るのである、目的其者は不変不動であると考えることができる、此の不変不動なるものが変化を起すのである。私はプロチノスの時は永遠なるものの影である(III. Enneade 7)と云った語に深き意味を見出さざるを得ない。自己自身の中に不満を抱くもののみ、時

を見る、自己自身に於て満足するものの中には時はない、その物は永遠である。すべてのものの目的となり、全ての物がこれに向って動く一者、即ち善は不動でなければならぬ、絶対に自己自身の中に満足するものでなければならぬ、アリストートルの first mover の如きものでなければならぬ。一者は無限なる作用の不変不動なる統一と考えることができる。」(四 44f)

「意志の立場に於て意識我を超越して、すべての物を動くもの、変ずるものと見る。思惟我を超越するが故に、すべてのものが各独立の個体として、而も互に相関係し、一つの統一に入るのである。各人格は自由なるが故に、一つの「目的の王国」を作ると一般である。」(四 57)

一つ目の引用の最初にある「意志」は「自己」と考えてよいであろう。意志による運動は「目的」に向かうが、その目的は動因であるので、始りからすでに存在している。運動の始まりから終わりまで、目的は存するので、「不変不動」と言えるであろう。「時」については『無の自覚的限定』で「永遠の今」という術語で詳細に論じられるが、ここでは、動くことには時間の経過が伴うとだけ理解しておく。「不満」の解消=目的を旨とした運動、を行う場合にのみ時は存在する。それ自身で過不足なく満ち足りているものは、動かず時はなく、永遠である。絶対者は、他の全ての目的であり、他を動かし自らは動かない「不動の動者」である。「無限の動」を含んではいないが、この言い方ではそれ自身は静的・超越的な存在という性格が強い。

二つ目の引用では、個体同士は、「目的の王国」において一致するとされており、その統一は、やはり静的・超越的な印象を受ける。

先に3(3)で神の「矛盾的自己同一」について触れたが、この二つの引用では「自己同一」の方向が前面に出ている印象がある。

次に、『無の自覚的限定』から引用する。

「真に無にして自己自身を限定するものというのは、自由なる人というべきものであろう。絶対の無によって限定されるものは自由なる人という如きものでなければならぬ。此の如き意味に於て無にして自己自身を限定するものは、自己の中に無限の弁証法的運動を包む円の如きものと考えることができる、自由なる人というのは自己自身の中に時を包む円環的限定とすることができる。パスカルは神を周辺なくして到る所に中心を有つ無限大の球 une sphère infinie dont le centre est partout,

la circonférence nulle partに喩えて居るが、絶対無の自覚的限定というのは周辺なくして到る所が中心となる無限大の円と考えることができる（パスカルの如く球と考えるのが適当かも知れないが私は今簡単に円と考えるに置く）。之によって之に於て到る所に無にして自己自身を限定する円が限定されると考えることができるのである。」（六 187f）

「周辺なくして到る所が中心となる無限大の円」が神で、その内で、その自己限定によって成立するのが「自己自身を限定する円」である人格とされている。人格としての円も「無限」の弁証法的運動を包むとされ、神は「無限」大の円なので、ややこしい印象を受ける。

先に述べた発展的に小説を書いて行く例のように、自覚においては終わりが始まりに含まれ、発展的にその円環を繰り返すので、「無限の弁証法的運動」と言うことができる。自由な自己は、可能性としては、あらゆる内容を含んでいる（あらゆるものになり得る）ので、「無限の弁証法的運動」を含んでいる。あらゆるものになり得る、ということは、無限の展開＝時となり得る、ということと言えよう。現実にはあらゆるものになる、ということは難しいであろうが、我々は自己無化して既存のあり方を脱し、様々な状況に応じることができるので、可能性としてはあらゆるものになり得ると考えてもよいのではないか。そうでなければ、自由とは言えないであろう。言い換えれば、自己無化（自己否定）できるから、無限に展開し得る。

そして、神（絶対無）は、周辺がない、無限大の円で、あらゆる所が中心となり得る、とされている。その中心の一つ一つが人格である。可能性としてあらゆるものになり得る自由は自己無化を要することを前の段落で述べたが、人格の自己無化は、絶対無の自己限定とすることができるのではないか。3 (3) では、既存のあり方を自己破壊して新たなあり方を求める「連続運動」は、「神の絶対愛」により成立すると考えたが、「自己破壊」は「自己無化」と言ってよいであろう。人格（個々の円）の展開の無限性は、絶対無（周辺なき無限大の円）の自己限定であることから来る、と西田は考えていると思われる。

「私と汝」は、円の比喻で語られる場合は、「円と円」となる。

「唯、私に対して如何ともすることのできないものは汝である、真に私に対立し、真に客観的というものは自然ではなくして汝でなければならぬ。ノエマ的限定を没したノエシス的限定というべきものは私と汝との関係でなければならぬ、周辺なき円の自己限定として到る所に限定

される円と円との関係は私と汝との関係でなければならない。」（六 198）

対象的な「物」は私の認識や行為の対象であり、私の操作を受ける。私の操作の埒外にあり、如何ともし難く、受容するしかないものが、「汝」である。「ノエマ的」は「对象的」、「ノエシス的」は「作用（行為）的」としておく。「私」と「汝」は、行為の領域で「自由」と「自由」として関わると言えよう。「私と汝」の関係は、周辺なき円の自己限定として到る所に限定される円と円との関係とされている。一つ前の引用に関して、自己の「自己無化」を含む「自由」が「絶対無」の自己限定である、と考えた。その自己限定は、様々ありえ、その一つ一つが各々の人格と考えられよう。

「周辺なき円の自己限定として無数の円が成立するということは人格が人格に於て成立するということを意味するであろう。而して何処までも無が無自身を求め無が無自身を限定することが真の愛というべきものであり、自愛というのも斯く考えるべきものであるとすれば、周辺なき円の自己限定と云うべきものは絶対の愛と考えることができ、絶対の愛によって私と汝とが限定されると云うことができる。真の自愛は他愛であり他愛はその実自愛である、そこに汝自身の如く汝の隣人を愛せよという語の意義が理解されるのである。对象的限定に沿って自己自身を限定するという自愛から何処まで行っても他愛は出て来ない、而してそこに真の人格的愛というものもないのである。真の愛はかかる方向の否定でなければならぬ、故に真の愛はケルケゴールが、Leben und Walten der Liebe “に於て云って居る如く「汝は愛せざるべからず」である。」（六 198f）

この引用では、「私と汝」の、より実質的な関係が語られている。「無が無自身を求め無が無自身を限定することが真の愛」とされている。これは「他愛」のことであり、他を生かすことと理解できよう。他愛が真の自愛だとされている。対象（ノエマ）的な自己を追求する自愛は、人格の本来の働きではなく、自己無化して他を生かすのが人格の働きだということであろう。働き（ノエシス）としての自己が絶対無の自己限定だとすると、自己は無（自己無化）ということになる。自己無化は他を生かす他愛でもあり、自己を追求する自愛でもあることになる。3 (2) で検討した、人格同士、「私と汝」の愛の関係が、この引用では、「周辺なき円の自己限定は絶対の愛」で、「絶対の愛によって私と汝とが限定される」とされ、「円」

の比喩で語られている。

#### 4 自己否定して「他」になるものとしての「人格」

以上見てきた西田思想における「人格」の諸規定を振り返り、その特徴を考察しよう。「理性」（実在、神、世界の働きの現れ）、「愛」、「独立・自由」、また、カントの「目的」そのもの、といった規定は、初期から晩年まで維持されている。しかし、それぞれの詳細は、特に「非連続の連続」が導入された『無の自覚的限定』以降は、逆説的な性格が強くなる。理性と意志、人格と人格（私と汝）、絶対者（神、世界）と人格と関係が、それぞれ単なる並存ではない、矛盾した（無を介した）相互限定として示される。我々は、その相互限定を、3で検討したことから、「非連続の連続」、「弁証法的関係」<sup>25</sup>、「矛盾的自己同一」という「逆説的」な関係と見なすことができよう。「非連続の連続」、「弁証法的関係」、「矛盾的自己同一」という「人格的關係」にあるものが「人格」と言えよう。自己（人格）と絶対者（世界、神）の関係については、2（2）で見たように、竹村牧男が「心と仏」（個と全）の矛盾的自己同一」を指摘している。「私と汝」については、2（3）で見たように、氣多雅子が絶対否定を介して向かい合っている「私と汝」の関係に立つものが、人格同士であると指摘している。小論の考察で明らかとなった西田の「人格」概念の特徴は、それらの指摘と符合すると言えよう。

そこで問題となるのは、『無の自覚的限定』から使われる、「私と汝」の関係などを表す述語である「非連続の連続」、対立の止揚を意味する「弁証法」、「歴史的世界」が語られるようになってから多用される「矛盾的自己同一」という三つの術語の異同や関係である。これに関しては、我々のこれまでの考察を踏まえると、これらは何れも自他の相互変換を表す術語であるので、焦点を当てる局面の違いはあるが、実質的に同じと考えてよいのではない。対立するものへ（個物から個物へ、現在から現在へ、点から点へ、等）の飛躍的移行が「非連続の連続」であり、その歩みの全体は対立の統一なので「弁証法」（絶対弁証法、場所的弁証法、具体的弁証法、質的弁証法）と言え、自己否定して対立するものになることが自己であることが「矛盾的自己同一」と言ってもよいのではない。そこで、「矛盾的自己同一」という術語に代表させれば、西田における「人格」は、「矛盾的自己同一」的なものと言えよう<sup>26</sup>。言い換えれば、「自己否定して他の人格になる」のが「人格」と言えよう。

「西田は、その絶対的なものは、絶対の自己否定を本質

とすべきことを鋭く論じている」（2（1）で言及した竹村牧男の指摘）のであり、3（3）で引用したが、西田は「私の絶対矛盾の自己同一というのは、宗教家の所謂神に相当すると云ってよい」（九 119f）と言っており、人格は「矛盾的自己同一」としての「絶対者」によって成立していると言える。

そして、人格同士の関係と、人格と絶対者の関係という（小坂国継の言う）「二重構造」については、どう考えるべきだろうか。人格は「矛盾的自己同一」としての「絶対者」によって成立している、と今述べたので、こちらを根本に見るべきであろう。3（3）の「個物」の検討によれば、人格は「点（自由、現在）から点（自由、現在）へ」と「動く個物」であった。この運動が絶対者の自己限定であった。この運動は、その項である人格同士（自他）を成立させる。この運動の項として、「自」も「他」も人格だと言えるだろう。従って、「自」も「他」も絶対者の自己限定と言えるのだが、あくまでこの運動にあるものとしてである。人格と絶対者の関係は、人格同士の関係においてある、とも言えるのだが、成立機構としては前者が根本と言うべきであろう。イメージとしては、自己否定して他の人格になることが水平的な運動で、絶対者の自己限定はその運動を成立させる垂直的な運動という構図であろう。

最後に、「物」も人格とされることについて付言したい。西田思想では、自他の相互変換としての「人格的關係」にあるならば「物」も「人格」と考えるのが適当だが、西田から離れた場合、直ちに承服はできないであろう。概念的に言えば、理性、愛、自由・独立といった「人格」の基本的規定は「物」に適用できないのではない、特に物は自由に行為することはないのではない、という疑問がある。この疑問に関しては差し当たり、ここで問題となる「物」は、対象的な物体ではないこと、絶対者の自己限定すなわち世界の現れであること、が指摘できる。より詳しく論ずるためには、西田における、「自由」や「制作」（ポイエシス）のさらなる検討が必要であろう。

<sup>27</sup>

#### 5 おわりに

4の最後で挙げた、「自由」や「制作」（ポイエシス）についてのさらなる検討、また、1（4）で言及した、人間存在の宗教的と言うべき根底的な深層と日常の関係についての明確化、については他日を期したい。その際、「人格」について、西田には直ちには意をはかりかねる叙述

があるので、その検討を行うことも必要だと思われる。例えば、「人格としては親も子を生まない」、「神は人格そのものの否定を求める」といった趣旨の叙述がある。一見奇異な主張の背景には、西田独特な考えが現れていると思

われる。

#### 註

西田の著作からの引用は旧版全集（岩波書店）から行い、巻数を漢数字で表し、頁数を付す。頁の後の「f」は「und die folgende」で、次の頁に続くことを示す。引用文中の〔 〕は筆者の補足である。旧字体・旧仮名遣いは、適宜新字体・新仮名遣いに改めた。

<sup>1</sup> 「非連続の連続」については、「西田幾多郎『無の自覚的限定』における「非連続の連続」(『米子工業高等専門学校研究報告』第59号、2024)、「私と汝」については、「西田幾多郎『無の自覚的限定』における永遠の今」と「私と汝」(『米子工業高等専門学校研究報告』第60号、2025)、で考察した。

「非連続の連続」は「対象的に関係しないものの関係」であり、その連続（関係）は様々なものがあり得ると言える。小論の3(3)では、個物（人格）の「点（自由、現在）から点（自由、現在）へ」の飛躍的運動として考察した。

<sup>2</sup> 「即非の論理」そのものや、それと西田の「矛盾的自己同一」や「逆対応」の異同については、ここでは措いておく。

<sup>3</sup> 「寸心」は、西田が1901年に当時参禅していた雪門老師から受けた居士号である。

<sup>4</sup> 「時代の「もの」とは、「物となって見、物となって行く」という西田の姿勢を受けていると思われる。この箇所では竹村は詳論していないが、主体の根底を明らかにし、そこから歴史的な社会を基礎付けるという西田の哲学的営為は、時代が西田に課した要請であり、それに従事する西田は「物」と言えよう。「物」というと受動的な印象だが、西田は真の受働からこそ真の能働が出てくると考えている。この点に関しては、藤田正勝『西田幾多郎の思索世界—純粋経験から世界認識へ』(岩波書店、2011年)、第10章5「歴史的現実と宗教」が明解に論じている。なお、「物となって見、物となって行く」は「物となって考え、物となって働く」などいくつかバリエーションがあり、言葉としては『哲学論文集 第三』(1939)から見られる。ただそれ以前に、『哲学の根本問題 続編（弁証法的世界）』(1934)の後半からは、それまで「物」になることは、動かない対象存在になることと見なされ否定的に語られていたのが、積極的な側面が見られるようになってくるように思われる（とはいえ、文脈によっては、否定的に語る場面もある）。詳しい検討はここではできない。

<sup>5</sup> 「さらばとて[人格は]カントのいった様な全く経験的内容を離れ、各人に一般なる純理の作用という如き者で

もない。人格は其人其人に由りて特殊の意味をもった者でなければならぬ」(—151)という言もある。

<sup>6</sup> 西田の神秘主義的・発出論的側面への疑念が、後の田邊元の西田批判の一つの論点であった（田邊「西田先生の教を仰ぐ」、『田邊元全集』第四卷、筑摩書房、303-28頁）。ただし、田邊が直接非難の対象としているのは『一般者の自覚的体系』(1930)である。

<sup>7</sup> 「矛盾的自己同一」は用語としては、『哲学論文集 第二』(1937)から登場する。内容的に同様な主張はそれ以前にも見られる。「矛盾的自己同一」については様々な解釈があるだろうが、概略的には「矛盾・対立の、矛盾・対立が解消してしまうのではない、統一」と言えるだろう。小論4では、「自己否定して対立するものになることが自己であること」とした。

<sup>8</sup> 「一般者の自己限定」は『働くものから見るものへ』(1927)から論じられ、以降の著作全てで登場するが、特に多いのは『一般者の自覚的体系』(1930)と『無の自覚的限定』(1932)である。「世界の自己限定」は、『無の自覚的限定』から現れ、『哲学論文集 第一—哲学体系への企図—』(1935)で特に多い。「絶対者の自己限定」は、『哲学の根本問題 続編（弁証法的世界）』(1934)、『哲学論文集 第四』(1941)、『哲学論文集 第七』(1946)で一か所ずつ見られる。「場所の自己限定」は、『一般者の自覚的体系』(1930)以降見られ、それほど多くはないが、『無の自覚的限定』、『哲学論文集 第六』(1945)ではやや多い。

<sup>9</sup> これは、雑誌論文をまとめて刊行する際、付された第四篇第五章「知と愛」からである。この章は元々は『善の研究』の一部として書かれたものではない(—196)。

<sup>10</sup> 愛以外の契機も入り、また長くなり恐縮だが、『善の研究』の最後の段落全体を参考までに掲げておきたい(第四篇第五章「知と愛」の最後の部分)。綿密な議論が展開されている訳ではないが、ここには諸宗教についての西田の基本的考え方が表われていると思われる。

「以上少しく知と愛との関係を述べた所で、今之を宗教上の事に当てはめて考えて見よう。主観は自力である、客観は他力である。我々が物を知り物を愛すというのは自力をすてて他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外にないものとすれば、我々は日々到他力信心の上に働いて居るのである。学問も道徳も皆仏陀の光明であり、宗教という者は此作用の極致である。学問や道徳は個々の差別的現象の上に此他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全体の上に於て絶対無限の仏

陀そのものに接するのである。「父よ、もしみこころにかなわばこの杯を我より離れたまえ、されど我が意のままをなすにあらず、唯みこころのままになしたまえ」とか、「念仏はまことに浄土にむまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」とかいう語が宗教の極意である。而してこの絶対無限の仏若しくは神を知るのは只之を愛するに因りて能くするのである、之を愛するが即ち之を知るである。印度のヴェーダ教や新プラトニズムや仏教の聖道門は之を知るといい、基督教や浄土教は之を愛すといひ又はこれに依るといふ。各自其特色はないではないがその本質に於ては同一である。神は分析や推論に由りて知り得べき者でない。實在の本質が人格的の者であるとすれば、神は最人格的なものである。我々が神を知るのは唯愛又は信の直覚に由りて知り得るのである。故に我は神を知らず我唯神を愛す又は之を信ずという者は、最も能く神を知り居るものである。」(一 199f)

<sup>11</sup> 拙論「西田幾多郎『無の自覚的限定』における「永遠の今」と「私と汝」」(『米子工業高等専門学校研究報告』第60号、2025年)

<sup>12</sup> 田邊元における対他関係については、ここで扱うことはできないが、次の拙論で検討した。「田邊元における対他関係の問題」、宗教哲学会編『宗教哲学研究』、第30号、2013年。

<sup>13</sup> ただし、内容的に後の「個物」と「一般」の関係と似たことが述べられている。「真の一般と個性とは相反する者でない、個性的限定に由りてかえって真の一般を現わすことができる、芸術家の精巧なる一刀一筆は全体の真意を現わすためである。」(一 43)

<sup>14</sup> 「非連続の連続」については、拙論「西田幾多郎『無の自覚的限定』における「非連続の連続」」(『米子工業高等専門学校研究報告』第59号、2024年)で検討を行った。

<sup>15</sup> 『哲学の根本問題 続編(弁証法的世界)』(1934)からは、「ポイエシス」と術語化される。

<sup>16</sup> この引用では、個物と人格が区別されている様にも受け取れる。この引用は、論文「私と汝」の終わり近くの叙述だが、論文「私と汝」では、「個物と環境」を一つの論題として、「弁証法的関係」を検討している。詳論できないが、その検討を踏まえ、「私と汝」の関係を論ずるといふ流れなので、「個物と環境」のように「人格と神」は…、という叙述になったと思われる。つまり、この引用でも個物と人格は同じと受け取っておく。

<sup>17</sup> 内容的に同じことは、それ以前にも見られる。『善の研究』では、ゲーテの「自然は核も殻も持たぬ、すべてが同時に核であり殻である」という言葉が引かれている(一 191)。

<sup>18</sup> くどい言い方になってしまうが、「私は汝、汝は私、つまり、私は私のままでは私ではなく、汝になることで

私となる(汝も同様)」ということになる。

<sup>19</sup> キェルケゴールの宗教性A(自己無化による神との一致と理解しておく)を想起することができる。周知のように、キェルケゴールは、宗教性Aではなく、神と人間の逆説的な関係、宗教性Bを実存の信仰と考えた。西田はキェルケゴールの「逆説」について、『無の自覚的限定』などで言及している。

<sup>20</sup> 「無基底的」は、現れの他に本体があるのではなく、現れ=本体であるようなあり方、としておく。「無基底的」については次の拙論で言及した。「西田幾多郎における「歴史的世界」と「實在」」米子工業高等専門学校研究報告、第58号、2023年。

<sup>21</sup> 「絶対矛盾の自己同一として過去と未来とが同時存在する歴史的空間即ち歴史的現在に於て、与えられたもの即ち作られたものが、自己自身を否定することによって、消え行くこと即ち過去に入ることによって、新なる物が現れることである、即ち物が創造されることである。それが作られたものが作るものとなる、創造されたものが創造すると云うことである。」(九 16f)

「それ[人格としての個物]は絶対矛盾の自己同一が自己の中に自己を映す世界の個物として、いつも絶対矛盾の自己同一に対するもの、即ち神に対するものでなければならぬ。我々は自己成立の根柢に於ていつも神に対して居るのである、云わば向わんと欲すれば背く絶対に触れて居るのである。此処に無限なる当為の根柢があるのである。我々は矛盾の生命の根柢に於て絶対の命令に接して居るのである。(中略)我々は此世界の外から抽象的に神の声を聞くのではなく、作られたものより作るものへという行為的直観の底からでなければならない。すべてが経験の地盤からでなければならない。我々は創造的世界の創造的要素として、制作的に神の声を聞くのである。」(九 141f)

「我々は意識的に自由であればある程、逆に行為的直観的に絶対矛盾の自己同一に対するのである。絶対矛盾の自己同一的現在として自己自身を形成する世界の個物として、我々は何処までも自己自身の生死を問うものに対するのである。そこに我々の意識し作用は何処までも当為的でなければならない所以のものがあるのである。」

(九 193)

「真の直観の世界は、我々が個物的であればある程、苦悩の世界であるのである。」(九 201)

「絶対矛盾の自己同一の世界に於ては、個物が個物自身を形成することが世界が世界自身を形成することであり、その逆に世界が世界自身を形成することが個物が個物自身を形成することである。」(九 212)

<sup>22</sup> 造詣がなく例示するだけで恐縮だが、真言思想の

「心月輪」(良寛が書いたことで知られる。ちなみに良寛は曹洞宗の国仙和尚から印可を受けた)、禅宗における「円相」(とりわけ「十牛図」は様々な分野で取り上げられている)が比較的有名と思われる。

<sup>23</sup> 参考までに、この引用の前後を挙げておく。「無の方

向というのは、意識の統一を離れることではない。この方向を自己の中を含むことによって、意識統一が意識統一となるのである。プロチンが我々の心は円形運動をなすと云った如く、意識の統一は始となると共に終となるものでなければならぬ、原因となると共に目的となるものでなければならぬ。此円形が単なる円形であって、幾度でも同じ回転運動をするに過ぎないと考えられる時、単に自然界を見るのみであるが、この回転運動自身が螺旋状にして積極的意義を有する時、我々は意識統一の世界を見ることができるのである。意識の統一の根柢には、創造もしない創造されもしないというスコトゥス・エリユーゲナの第四の立場の如きものがなければならぬ。かかる立場が直に第一の創造の立場である時、真の意識統一を見るのである。意識の統一に於ては、統一が内在的であって、各の点が全体の意義を含むと考えられるのも、右の意味に外ならない。意識の統一は一面に於て無でなければならぬ、自己自身の否定でなければならぬ、此点に於て自己はすべての自己の内容に対して平等である。併し之と共にすべての点に於てその原因となり目的となる故を以て、すべての点に働いて居ると云うことができる。」(四 154)

<sup>24</sup> 参考までに、この引用の前後を挙げておく。「判断は主語と述語との関係から成る、苟も判断的知識として成立する以上、その背後に広がる述語面がなければならぬ、何処までも主語は述語に於てなければならぬ、判断作用という如きものは第二次的に考えられるのである。所謂経験的知識といえども、それが判断的知識であるかぎり、その根柢に述語的一般者がなければならぬ。すべての経験的知識には「私に意識せられる」ということが伴わねばならぬ、自覚が経験的判断の述語面となるのである。普通には我という如きものも物と同じく、種々な性質を有つ主語的統一と考えるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの点ではなくして一つの円をなければならぬ、物ではなく場所をなければならぬ。我が我を知ることができないのは述語が主語となることができないのである。」(四 278f)

<sup>25</sup> 「弁証法」については、小論での引用で度々出てきていたが、詳論することはできない。対立が過程的に解消する「過程的弁証法」ではなく、絶対的な他と自己の一致である「絶対弁証法」(「場所的弁証法」、「具体的弁証法」、「質的弁証法」とも言われる)であることのみ述べておく。一つだけ引用しておく。「絶対の死即生ということ、唯、ノエマ的[对象的]に一つのもものが死即生であると云うのではない、又、過程的に否定が即絶対の肯定であると云うのでもない、自己が絶対に他なるものと一であるということではなければならぬ、自己の中に絶対の他を見、絶対の他の中に自己を見ると云うことでなければならぬ。」(六 378)

<sup>26</sup> 三つの術語のうち二つが使用されている叙述をいくつか提示したい。これらの叙述からも、三つの術語についての我々の解釈は適当と言えると思われる。(三つとも見られ、比較的短く、他の契機がさほど入っていない、引用に適切な叙述は、見つからなかった。)

「そこ[無限の直線的持続]でも連続を主として弁証法的過程を考えることもできるであろうが、私は右の如く絶対弁証法の立場から非連続の連続というのである、現実から現実に関わり行くのである、絶対に触れ行くのである。」(八 380)

「非連続の連続として自己矛盾的な世界が、矛盾的自己同一として、無限に自己自身を映すと考えることができ、何処までも自己自身を限定する個物としてのモノイドは、その一つの射影図として一つの世界ということができる。非連続の連続とは相互表現ということではなければならない。」(九 89) (ここでは「表現」は単に「映す」と考えておく。)

「多と一との矛盾的自己同一的一般者、所謂弁証法的一般者の自己限定として、作られたものから作るものへと、ポイエシス的に、行為的直観的に実在を把握し行く所に、客観的知識が成立するのである(真の具体的一般者とは個物を含むものでなければならぬ、場所的でなければならぬ。)」(九 198f)

「仏教に於ても、真宗に於ての如く、仏は名号によって表現される。名号不思議を信ずることによって救われると云う。絶対者即ち仏と人間との非連続の連続、即ち矛盾的自己同一的媒介は、表現による外ない、言葉による外ない。仏の絶対悲願を表すものは、名号の外にないのである。」(十一 442)

<sup>27</sup> 詳しい考察ではなく、あくまで一つの観点の紹介だが、『善の研究』では、「事実上の花は決して理学者のいう様な純物的の花ではない、色や形や香をそなえた美にして愛すべき花である。ハイネが静夜の星を仰いで蒼空に於ける金の鋏といったが、天文学者は之を詩人の嘆語として一笑に付するのであるが、星の真相は反って此の一句の中に現われて居るかも知れない」(一 60)という見方が示されている。そして、「真実在は普通に考えられて居る様な冷静なる知識の対象ではない。我々の情意より成り立った者である。即ち単に存在ではなくして意味をもった者である。それで若しこの現実界から我々の情意を除き去ったならば、もはや具体的事実ではなく、単に抽象的概念となる」(一 60)と言われている。西田のロマン主義的傾向が伺える。知情意すべてを含む見方が真実在を把握する客観的な見方であるという姿勢は、初期から晩年まで一貫していると考えられる。この見方で見られた「物」は、我々に作用を及ぼす(行為する)「人格」と考えることもできるのではないだろうか。

# Examining the Relationship Between English Proficiency, AI and Translation Application Usage, and Motivations for Learning English Among NIT-Kosen Students

Sean A. E. McPhail\*

## Abstract

This paper examined how students at Yonago National College of Technology use AI and Translation applications and how this relates to their English proficiency. It was found that there was little difference in technology use between grades 3, 4, and 5. The best scores on English proficiency tests were associated with students who had higher motivation to learn English, while technology use showed a negative impact on their English ability. However, these results did not show a decrease over a longitudinal cross-section. The report found that technology use is not the most important factor in English proficiency and suggests it should be harnessed to increase student motivation to learn English. Increasing the amount of speaking time in classes and connecting using English to their future is suggested to increase motivation.

## 1. Introduction

Students at Yonago National College of Technology (YNCT) have been learning English to improve their understanding and ability, thereby enhancing their opportunities in an increasingly global work landscape. The global engineering program initiative aims to enhance these human resources on their journey toward global understanding, improved learning ability, and language development. With this in mind, this paper examined ways in which students can harness ever-increasing technological developments to improve language learning. What ways can this be achieved?

The aim of this study was to monitor students' technology use in compulsory grade 3 English classes (n=204) and their methods of studying and learning English. These results would then be compared with grade 4 (n=23) and grade 5 (n=19) students taking elective English courses. The purpose was to examine how students use technology and which uses correlate with improved results on English proficiency tests.

Some recent research suggests that using AI for students to converse with can enhance motivation among English learners in L2, leading to significantly improved learning outcomes (Wei, 2023). Other studies have suggested that students view these AI tools as more of a novelty and not particularly effective in improving language outcomes (Gallacher et al., 2018). This study looked at how students used technology and AI in their L2 learning and whether specific usage

methods were associated with improved learning outcomes. It aimed to examine whether the use of technology would inhibit learning and to identify the most important factors in improving English proficiency. Additionally, do these results change across grades, or are there significant differences by age or grade, or between compulsory and elective courses?

## 2. Study Design and Participants

The study initially administered a 25-item questionnaire to students in 3 separate English courses at YNCT (Table 1).

Grade	Classes and Credits
3	English Expression III (2 credits)
4	<u>Practical English</u> (2 credits)
5	<u>English Conversation</u> (2 credits)

Table 1: English Classes in this Study at YNCT  
(Underlined Subjects are Electives)

There were 204 students in English Expression III, 23 in Practical English, and 19 in English Conversation. The questionnaire was administered on Microsoft Teams and consisted of 23 questions using a 5-point Likert scale ranging from 1 (strongly agree) to 5 (strongly disagree), and 2 open-ended written response questions (Q24 & 25) to assess the students' perceptions towards learning English, study habits, and their technology usage when learning English (Table 2).

1. I like English / 英語が好きです。
2. I like watching English movies, TV shows, YouTube videos, or TikTok videos / 英語の映画やテレビ番組、YouTube や TikTok の動画を見るのが好きです。
3. I like listening to English music / 英語の音楽を聴くのが好きです。
4. I like speaking in English / 英語を話すのが好きです。
5. I use a translation application (e.g., Google Translate, ChatGPT, etc.) to help me write English assignments / 英語の課題を書くときに、Google 翻訳や ChatGPT などの翻訳アプリや AI を使っています。
6. I always use a translation application to help me understand English texts / 英語の文章を理解するために、いつも翻訳アプリを使っています。
7. I need to translate English writing to understand it / 英語の文章を理解するために翻訳が必要です。
8. I use an application to study and practice English / 英語を勉強して練習するためにアプリを使っています。
9. I study English in my free time / 暇な時に英語を勉強しています。
10. I study English every day / 毎日英語を勉強しています。
11. I get bored studying English / 英語の勉強が退屈です。
12. I feel embarrassed in English class / 英語の授業で恥ずかしい気持ちになります。
13. I feel uncomfortable when my teacher only speaks English / 先生が英語だけで話すと、私は不安に感じます。
14. I feel confident using English / 英語を使うのに自信があります。
15. English class is too long / 英語の授業は長すぎます。
16. When I understand English, I get happy / 英語が理解できると嬉しいです。
17. I want to speak English better / もっと上手に英語を話したいです。
18. I want to communicate with people from other countries / 他の国の人とコミュニケーションを取りたいです。
19. I like to study other subjects more than English / 英語よりも他の教科を勉強する方が好きです。
20. I think studying English is a waste of time / 英語を勉強するのは時間の無駄だと思います。
21. English is important for me now / 現在、英語は私にとって重要です。
22. English is important for my future / 私の将来にとって英語は重要です。
23. How often do you use translation software (e.g., Google Translate) or AI when studying English? / 英語を勉強する時、どれくらいの頻度で翻訳ソフト (例: Google 翻訳) や AI を使いますか?
24. What do you want to learn English for? (e.g., to watch English movies, listen to English music, speak to people from different places, etc.) / 英語を学ぶ目的は何ですか? (例: 英語の映画を観るため、英語の音楽を聴くため、海外の人々と話すためなど) ?
25. How do you use technology in English class, when you study English, or when you do English homework or assignments? / 英語の授業で、英語を勉強する時や、英語の宿題や課題をする時に、どのようにテクノロジーを使っていますか?

Table 2: Questionnaire Given to Students

Negative perceptions were considered as lower numbers, and vice versa; higher scores indicated more positive responses regarding usage, study, and likes related to technology, learning English, and study in

general. For questions 24 and 25, students wrote responses to indicate their reasons for learning English and the specific ways they use technology. This questionnaire was considered good, as results gave a Cronbach's Alpha of 0.83.

Questions were grouped into 3 categories: questions 5–8 & 23 indicated technology usage; questions 1–4, 12–18, 21, & 22 indicated motivation to learn English; and questions 9–11, 19, & 20 were considered a general inclination to study English. Average scores for each category were calculated, yielding students' overall scores for Motivation (motivation to learn English), Inclination (inclination to study English), and Tech Use (technology use).

Students were then administered 10 listening quizzes over 10 separate weeks during the semester to assess their English ability. The quizzes used passages from their textbook, with 10 words at different locations removed and a gap that students had to fill. The students were required to listen to a recording of an English speaker reading the text and write the missing words. Missing words were between 3 and 6 letters long and were separated by every 6 to 12 words. Words of the appropriate length were selected so there was not a uniform distance between words. This quiz was used because it has been shown to accurately assess English proficiency (Goto et al., 2010).

Answers were initially written on paper and then input into a Microsoft Forms quiz. Quizzes were given in the final 5 minutes of a typical English class, with scores unrelated to final grades, thereby minimizing stress for students and concerns about cheating. Results were tracked over the 10-lesson period to observe any changes correlated with Motivation, Tech Use, or Inclination.

### 3. Results

For Inclination, students' questionnaire results were grouped into 3 categories: Low Inclination, with an average score of 2.8 and below; Medium Inclination, between 3.0 and 3.6; and High Inclination, 3.8 and above. Grade 3 results showed that students with a High Inclination to study maintained consistently higher quiz scores (Figure 1). For grade 4 students, the results showed that those with a low initial inclination

showed consistent improvements and actually reached the highest overall quiz scores (Figure 2). Grade 5 students showed similarities to Grade 4, with improvements for Low Inclination students and declines for High Inclination students (Figure 3). Here, grade 5 students with Medium Inclination achieved the highest final scores (Figure 3).

Overall, the results showed distinct differences across grades, with High Inclination having the best results for grade 3 students, Low Inclination for grade 4, and Medium Inclination for grade 5. However, there were differences in the relative number of students in each category, with grade 3 students having a lower inclination to study, with over 40% in both low and medium inclination, n=81 for low and n=79 for medium (Figure 4). The higher scores for High Inclination in grade 3 may be related to fewer relative number of students studying more, as both grade 4 and grade 5 had the highest numbers in Medium Inclination (Figure 4). As grade 5 students had the lowest percentage of High Inclination and also showed the biggest change in relative results, the lower percentage of participants in a category likely shows more drastic fluctuations in results, and Inclination may not be the driving factor in improved English proficiency.

Figure 1: Results of 10 quizzes in relation to grade 3 students' inclination to study English

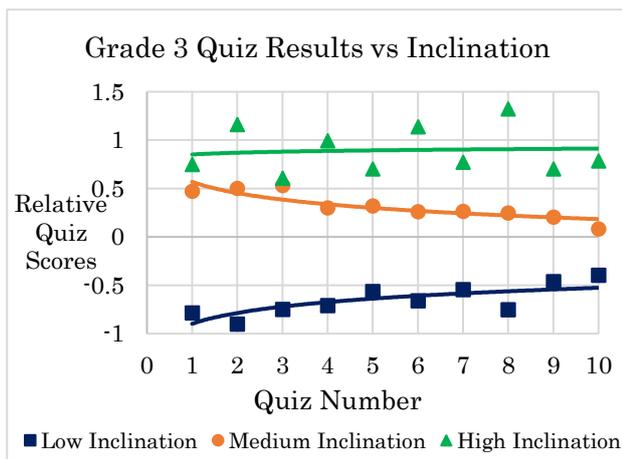


Figure 2: Results of 10 quizzes in relation to grade 4 students' inclination to study English

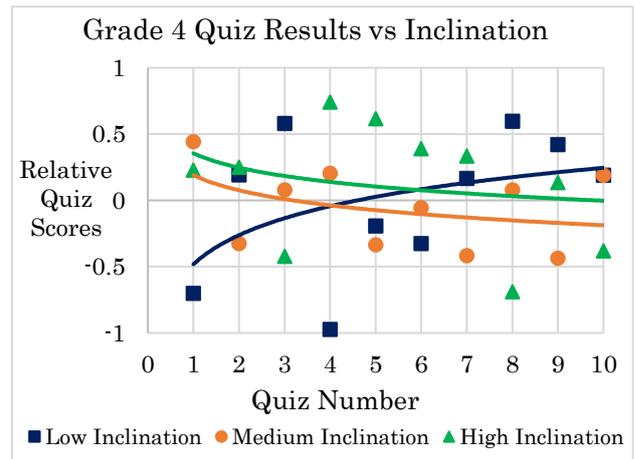


Figure 3: Results of 10 quizzes in relation to grade 5 students' inclination to study English

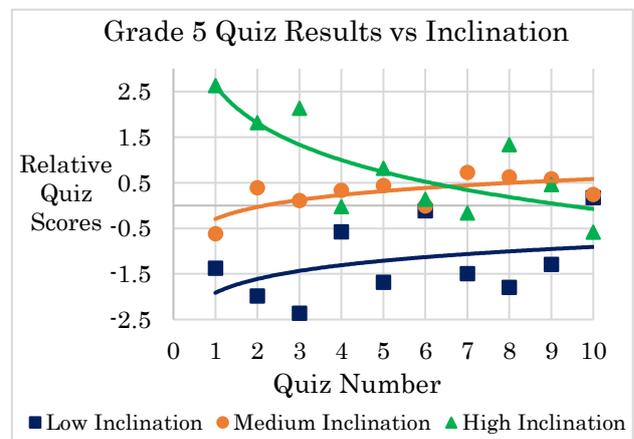
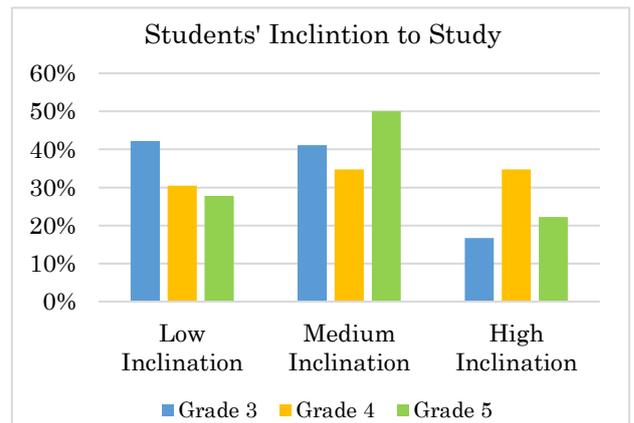


Figure 4: Percentage of students in 3 categories for inclination to study English



Quiz results, when measured against Motivation, showed consistently high scores for high motivation among grade 3 (Figure 5), grade 4 (Figure 6), and grade 5 (Figure 7) students. Motivation was grouped into 3 categories, such that Low Motivation was below 3.65,

Medium Motivation was between 3.65 and 4.1, and High Motivation was 4.1 and above. Motivation was relatively consistent across all quizzes and grades, with high motivation correlating with consistently high scores throughout the study period.

Figure 5: Results of 10 quizzes in relation to grade 3 students' motivation to learn English

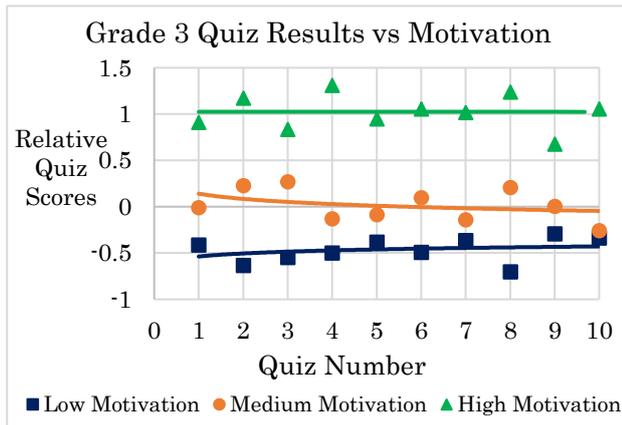


Figure 6: Results of 10 quizzes in relation to grade 4 students' motivation to learn English

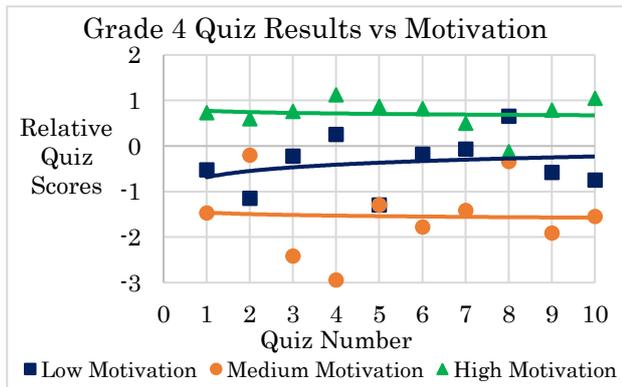
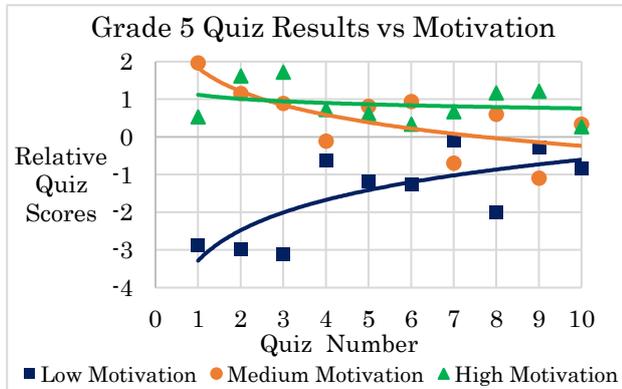


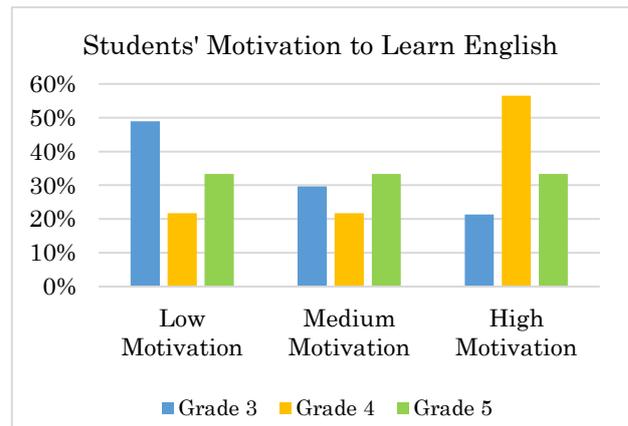
Figure 7: Results of 10 quizzes in relation to grade 5 students' motivation to learn English



Grade 3 students had the highest percentage of Low Motivation students, with grade 4 having the highest

relative motivation (Figure 8). This is consistent with the idea of elective subjects, as one would expect students with higher motivation to learn English to choose them. What it shows here is that the numbers and percentages of students in each category showed little difference, suggesting that motivation is a strong correlate of improved English proficiency.

Figure 8: Percentage of students in 3 categories for motivation to study English



Technology use was categorized as Low Tech Use (scores of 3.4 and below), Medium Tech Use (scores of 3.6 to 4.0), and High Tech Use (scores of 4.2 and above). Grade 3 results showed that Low Tech Use had the best scores and continued to improve more rapidly than either Medium or High Tech Use (Figure 9). For grade 4 students, the results showed that Low Tech Use correlated with the highest quiz scores (Figure 10), and likewise, for grade 5 students, the highest scores were for Low Tech Use (Figure 11). The difference was that for grades 4 and 5, Low Tech Use both showed a decline in quiz scores over the test period, with grade 5 showing a more significant drop.

The difference in technology use across grades was minimal, as the percentage of students using tech was similar in grades 3, 4, and 5 (Figure 12). Grade 4 had the lowest relative technology use among classes; however, there was no significant difference in changes in results across grades 3 and 4, with Low Tech Use showing the best quiz scores. Grade 5 had students with Medium Tech Use show the greatest improvements, lowering relative scores for High Tech Use.

Figure 9: Results of 10 quizzes in relation to grade 3 students' technology usage for studying English

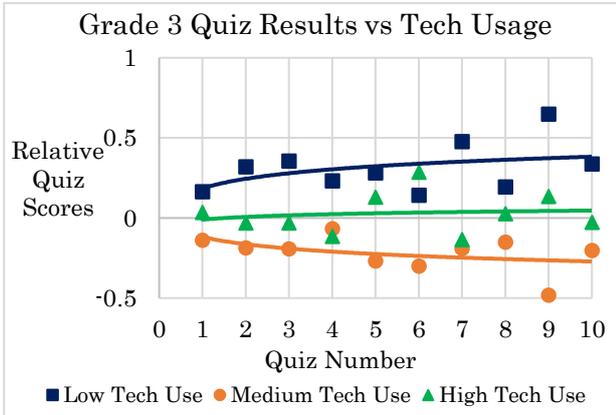


Figure 10: Results of 10 quizzes in relation to grade 4 students' technology usage for studying English

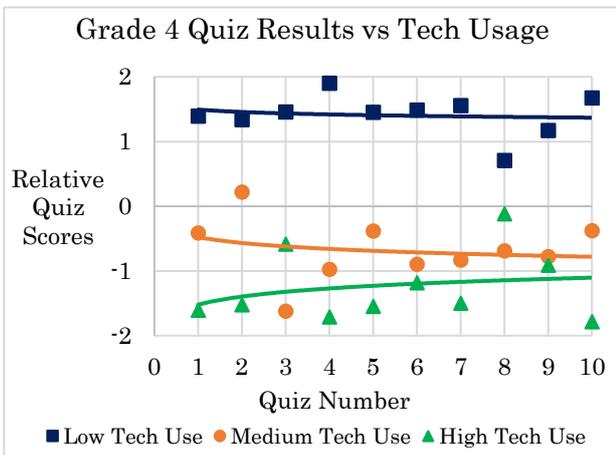


Figure 11: Results of 10 quizzes in relation to grade 5 students' technology usage for studying English

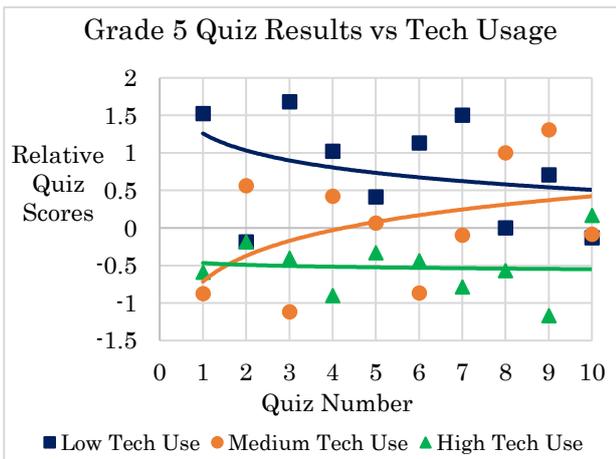
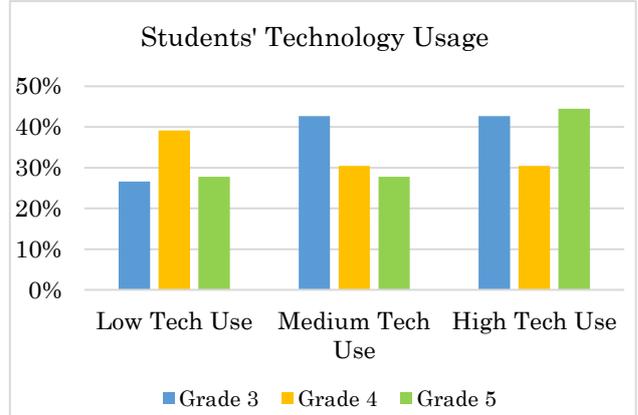


Figure 12: Percentage of students in 3 categories for technology use to study English



There were multiple reported methods that students in grades 3, 4, and 5 use technology to aid their English study. Answers ranged from using translation programs such as Google Translate and DeepL to looking up the meaning of individual words online (Figure 13). There was little difference in the quiz scores across the various methods of technology use for grade 3 students (Figure 13). For grade 4, attempting to use no technology and looking up the word's meaning online were correlated to the best quiz scores (Figure 14). This was consistent for grade 5, as looking up the word's meaning online also correlated to the best quiz scores (Figure 15). Overall, there was little significant difference in technology use and quiz scores: grade 3 showed relatively similar results for each method, while grades 4 and 5 showed some variation with small sample sizes for students using each method.

Figure 13: Methods that grade 3 students use technology for studying English

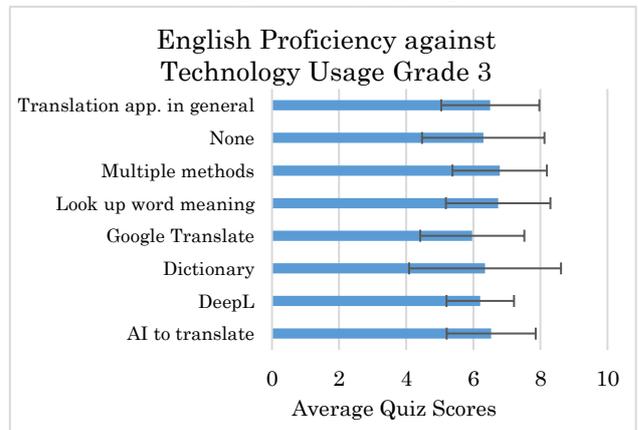


Figure 14: Methods that grade 4 students use technology for studying English

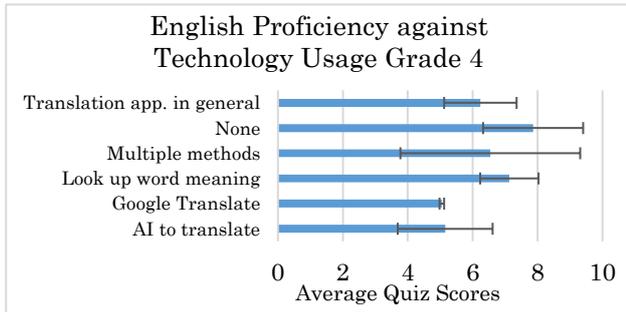
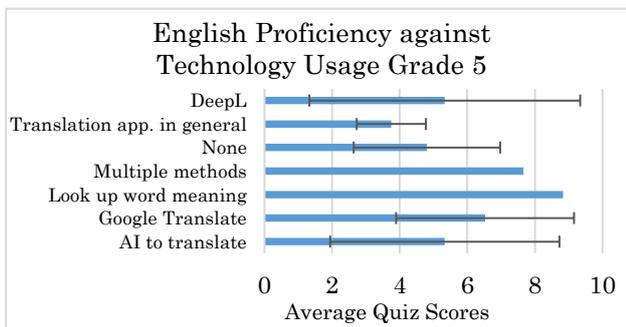


Figure 15: Methods that grade 5 students use technology for studying English



The highest proportion of grade 3 students used translation apps without specifically choosing one over another, at 28% (Figure 16). For grade 4, the highest percentage of students reported using no technology when studying English, at 26% (Figure 17). Grade 5 students used translation apps without specifically choosing one, with AI translating their content the most at 21% each (Figure 18). No single method was used more than any other, and the scores indicated that no method was clearly better or worse than the others.

Figure 16: Grade 3 students' self-reported methods for studying English with technology

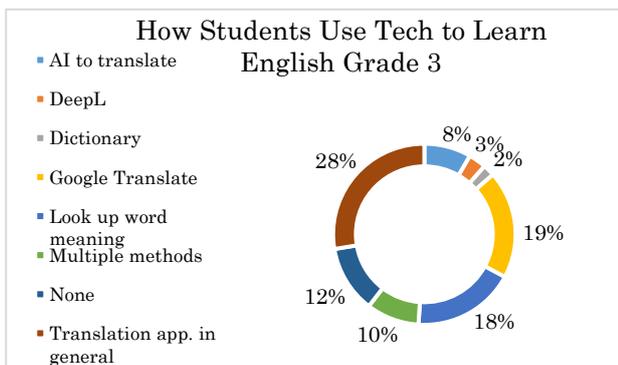


Figure 17: Grade 4 students' self-reported methods for studying English with technology

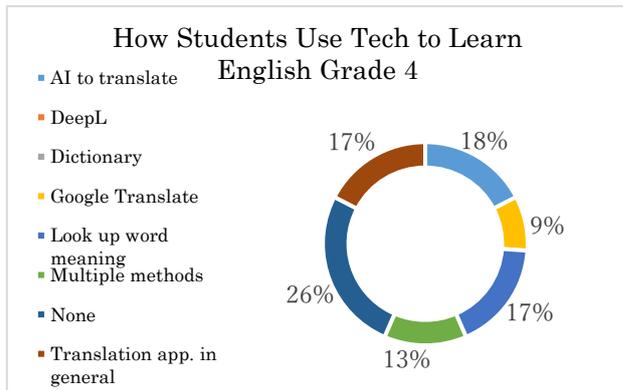
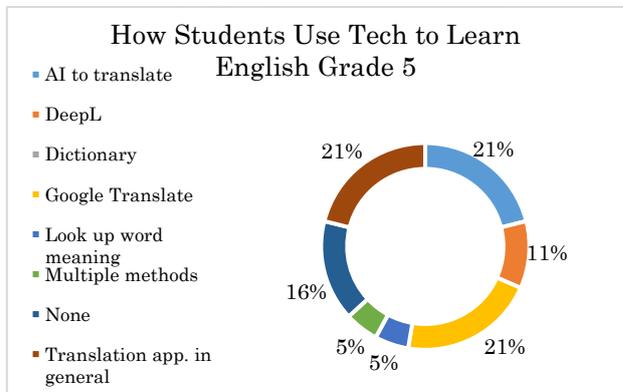


Figure 18: Grade 5 students' self-reported methods for studying English with technology



Students wrote a variety of reasons for wanting to learn English, including future opportunities, travel, music, work, and speaking with foreigners. Results showed that grade 3 students who were considering their future, traveling, and speaking with foreigners had the best quiz scores (Figure 19). Grade 4 students who considered their work and studies, as well as those with no clear reason to study English, achieved the highest scores (Figure 20). For grade 5 students, those who considered using English for travel achieved the best scores (Figure 21).

The highest percentage of grade 3 students cited wanting to speak with foreigners as a reason to learn English, with 31% (Figure 22). This was particularly true for Grade 5, with 52% of students wanting to speak with foreign people (Figure 23). There was a more even spread among grade 5 students, as music, travel, tests, and speaking with foreigners had the highest percentages and were similar values.

Figure 19: Grade 3 students' quiz results measured against reasons for wanting to learn English

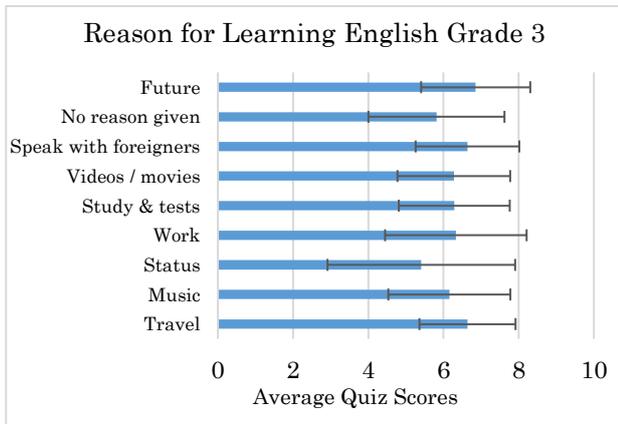


Figure 20: Grade 4 students' quiz results measured against reasons for wanting to learn English

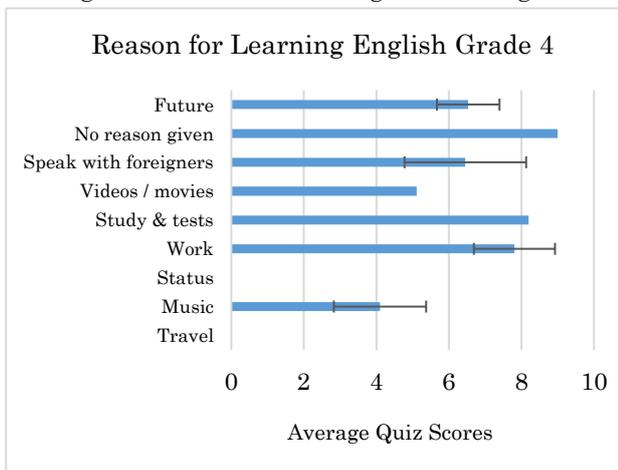


Figure 21: Grade 5 students' quiz results measured against reasons for wanting to learn English

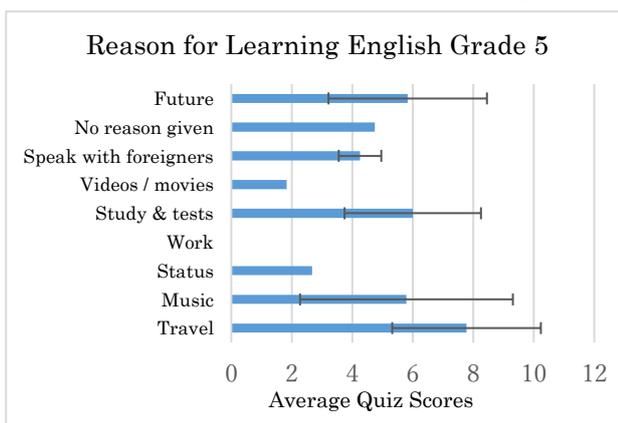


Figure 22: Grade 3 students' self-reported reasons for wanting to learn English

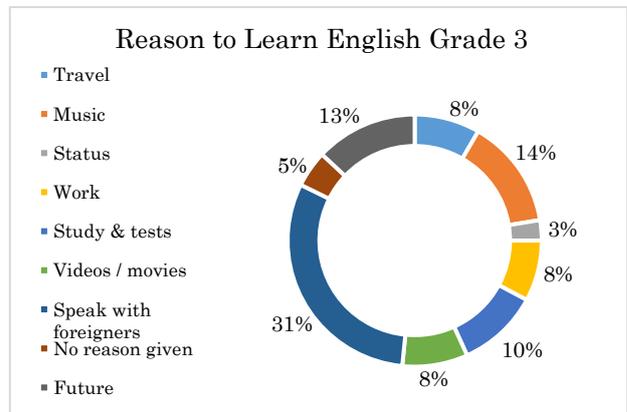


Figure 23: Grade 4 students' self-reported reasons for wanting to learn English

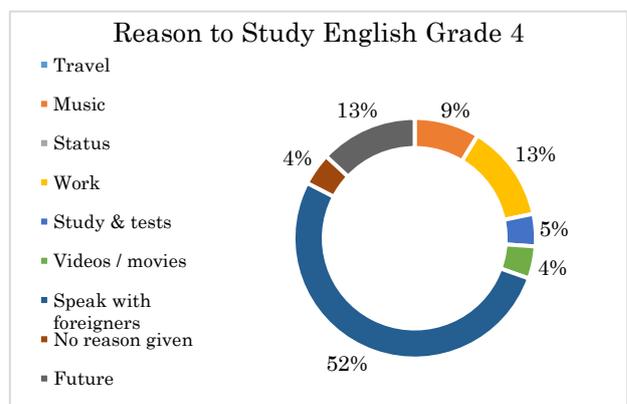
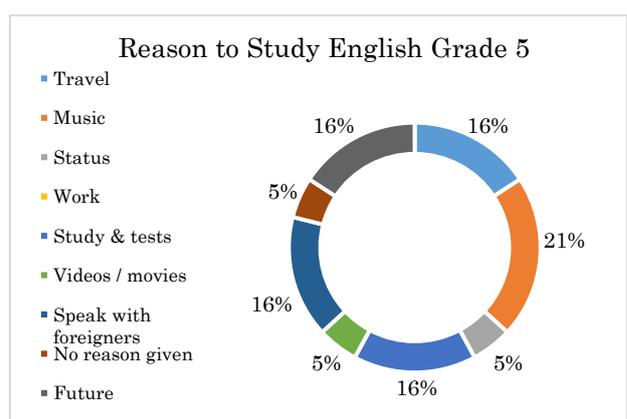


Figure 24: Grade 5 students' self-reported reasons for wanting to learn English



#### 4. Discussion and Suggestions for Course and Lesson Improvements

Based on questionnaire results, quiz scores, and self-reported technology use across all grades, students

showed the best English proficiency when their motivation to learn English was high. Higher technology usage correlated with lower English proficiency, suggesting that technology use should be carefully monitored. However, the most significant factor in English ability, improvement, and sustained results was motivation. When there was a drop-off in motivation, the results also began to decline, as evidenced by the grade 5 class. If students enjoy using technology, then it can help keep them motivated to learn. Identifying the reasons why students become and remain motivated to learn English, and how technology can be harnessed to achieve this, is important for future research.

With this in mind, the study showed that there are clear methods that can be implemented in future classes. **1) Linking the classroom content to students' future.** As a large percentage of students in grades 3, 4, and 5 showed positive results when they wanted to learn English for future prospects, classes should aim to highlight the many ways they can use English in the future. **2) More speaking opportunities, especially speaking with foreign people.** As the highest percentage of students selected this reason for wanting to learn English, it would be advantageous to add more speaking opportunities in class to increase their motivation. **3) Technology Usage Method Adjustments.** For this particular point, there were no clear winners or losers when it came to technology usage. However, excessive use was correlated with lower English proficiency. Technology should be used to build motivation, such as by allowing students to converse with people from other countries. Using technology to translate passages and words, and to help them write, seems ok if done in moderation and with the aim of increasing motivation.

## 5. Conclusion

This study considered how students' technology use correlated with their English proficiency. It was found that there was little difference among grade 3, 4, and 5 classes in terms of technology use. Higher technology usage when doing English tasks correlated with lower English results across the board. However, the more important factor in the results was the students'

motivation. Utilizing technology to increase motivation is important as it is not a fad and will continue to be incorporated into modern learning techniques. The aim should be to shift towards using it to increase motivation by connecting it to students' interests and their futures.

## 7. References

- Gallacher, Andrew; Thompson, Andrew; Howarth, Mark. (2018). "My robot is an idiot!" – Students' perceptions of AI in the L2 classroom. In Taalas, Peppi; Jalkanen, Juha ; Bradley, Linda; Thouësnny, Sylvie (Eds), *Future-proof CALL: language learning as exploration and encounters – short papers from EUROCALL 2018* (pp. 70-76). Research-publishing.net. <https://doi.org/10.14705/rpnet.2018.26.815>
- Goto, K., Maki, H., & Kasai, C. (2010). The Minimal English Test: a new method to measure English as a Second Language proficiency. *Evaluation & Research in Education, 23* (2), 91–104. <https://doi.org/10.1080/09500791003734670>
- Wei L (2023) Artificial intelligence in language instruction: impact on English learning achievement, L2 motivation, and self-regulated learning. *Front. Psychol. 14*:1261955. doi: 10.3389/fpsyg.2023.1261955

---

Manuscript accepted: March 2026

\* Department of Integrated Engineering, Liberal Arts Education Division

# ジュニアドクター育成塾を活用した 児童生徒への機械工学教育に関する取り組み

Initiatives related to mechanical engineering education for junior high school students utilizing the Junior Doctor  
Training Program

藤田 剛\*, 権田 岳\*, 青砥 大誠\*\*, 藤井 寛人\*\*\*, 三井 杏花\*\*\*\*, 米尾 遙仁\*\*\*\*\*,  
曲 沛霖\*\*\*\*\*, 岩倉 葵\*\*\*\*\*, 森下 央翔\*\*\*\*\*, 吉田 浩瑛\*\*\*\*\*,  
阿部 奏\*\*\*\*\*, 上村 航大\*\*\*\*\*, 村尾 拍哉\*\*\*\*\*, 天島 大耀\*\*\*\*\*,  
齊藤 寛人\*\*\*\*\*, 梶間 由幸\*\*\*\*\*

Tsuyoshi FUJITA, Takeshi GONDA, Taisei AOTO, Hiroto FUJII, Momoka MITSUI, Haruto YONEO,  
Hairin, KYOKU, Aoi IWAKURA, Hiroto MORISHITA, Hiroaki YOSHIDA,  
Kanade ABE, Koudai UEMURA, Hakuya MURAO, Taiga TENSHIMA,  
Hiroto SAITO, Yoshiyuki URUMA

## 概要

本報では、本校で実施されている「ジュニアドクター育成塾」の取り組みのうち、2024～2025年度に第二段階で実施されたテーマの「永久機関に関する研究」ならびに「3D プリンタを用いて製作した樹脂性試験片の衝撃試験」についての実施内容および成果を報告する。

### 1. はじめに

本校では、2022年度から国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が主催する次世代人材育成事業「ジュニアドクター育成塾」での採択を受け（実施代表者：梶間）、「KOSEN 教育の強みを最大限に活かした科学に熱狂的な情熱を持つジュニアドクターの育成」を掲げて、山陰から日本のものづくりを担う未来の博士を育成することを目標とする取り組みを行っている<sup>1)</sup>。対象は小学5年生～中学3年生までの児童および生徒であり、第一段階では、選抜試験（推薦、一般）による受講生40名を受け入れ、7～8ヶ月の間、全受講生が工学的内容の複数の実験実習を体験する。その経験を通じて、工学的な素養を身に着け

るとともに、自分が真に関心のあることを手探りで見つけることができるような配慮をしており、これは他の実施機関と比較して珍しい取り組みといえる。さらに、第二段階では、第一段階での実験への取り組みや作成したレポートにより選抜された10名が高専の研究室に配属され、高専の学生と共に研究活動を行う。本報では、2024～2025年度に実施されたテーマのうち、第二段階に進んだ受講生による「永久機関に関する研究」ならびに「3Dプリンタを用いて製作した樹脂性試験片の衝撃試験」についての実施内容および成果を報告する。

### 2. 永久機関に関する研究

本研究テーマは2024年度にジュニアドクター育成塾受講生のアイデアを基に実施された。図1は受講生によるアイデアスケッチの一例であり、白丸が鉄球、黒い丸および四角がネオジム磁石を示している。ネオジム磁石と鉄球を並べてそこに鉄球を転がして近づけると、ネオジム磁石に転がってきた鉄球が強い力で引き付けられ、その衝撃で反対側にくっついていていた鉄球が勢いよく飛び出す現象が観察される。これは「ガウス加速器」として知られているものであるが、受講生はこの現象をきっかけに永久機関に対する興味を持ち、研究を希望した（当時、受講生は熱力学第一法則、第二法則や力学的エネルギー保存則等の関連知識は学習していない）。

【原稿受理日】2026年3月18日

\* 総合工学科機械システム部門  
\*\* 米子市立弓ヶ浜中学校 3年  
\*\*\* 鳥取市立南中学校 3年  
\*\*\*\* 米子市立福生中学校 1年  
\*\*\*\*\* 米子市立後藤ヶ丘中学校 3年  
\*\*\*\*\* 米子市立加茂中学校 2年  
\*\*\*\*\* 総合工学科 1年  
\*\*\*\*\* 総合工学科機械システムコース  
\*\*\*\*\* 総合工学科情報システムコース  
\*\*\*\*\* 総合工学科化学・バイオ部門

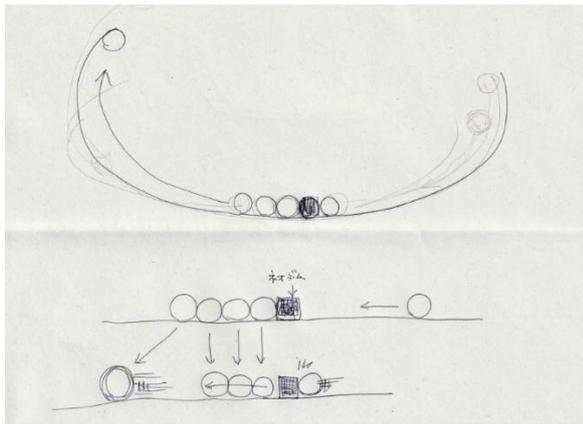
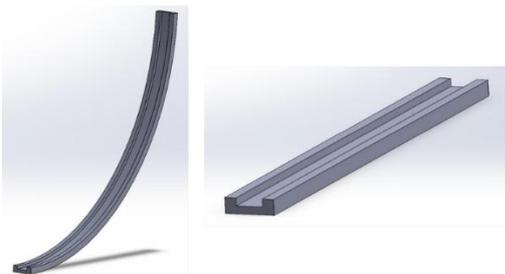


図1 永久機関のアイデアスケッチ

### 2-1. ガウス加速器による実験方法

図1のアイデアスケッチに基づいて、図2に示すレール状の部品を、3D-CAD (SolidWorks) および3Dプリンタ (FLASHFORGE Adventurer 4) を使用して設計、製作し、図3に示すように組み合わせることで実験装置とした。実験方法は、装置のレールの溝部に直径10 mmの鉄球とネオジム磁石球を並べ (図3の位置)、片端部の鉄球1個を高さ180 mmからレールに沿って自由落下させて下部の球に衝突をさせる。衝突により、逆端部の鉄球が跳ね返えされる動きを示し、その後、両端部の鉄球が交互に下部に並べた球に対して衝突、跳ね返りを繰り返すが、下部に並べる球の配置を変更した場合の両端の鉄球の動作における周期回数の違いを調べた。



(a) 半径180 mm (1/4円) (b) 長さ110 mm

図2 3D-CADで設計したレール状の部品



図3 実験装置および実験の様子

表1 両端の鉄球の動作における周期回数

球配置	周期回数
○○○○○	1
○○●○○	2~3
○○○●○○○	4~5
○●○●○●○	1~2

●：ネオジム磁石球 ○：鉄球

### 2-2. ガウス加速器による実験結果および考察

表1は、球配置を変えた鉄球の周期回数を示す。ネオジム磁石に対しての鉄球の配置により、衝突する力と磁力のバランスが変わり、ネオジム磁石を使用することによって周期回数の増加がみられた。受講生は、球配置の変更により永久に動き続ける条件が得られると予想していたが、実際にはそのようにはならず、この時点で「何故永久機関の実現が困難であるのか」について関連知識を紹介、説明するとともに、さらに考察をしてもらった。

### 2-3. 独楽による実験方法

受講生のアイデアによる実験で得られた結果から、エネルギーを多く蓄えることが可能な長時間動作する装置を製作することにより、永久機関の実現に近づけるのではないかと、この考察が得られた。そこで、次に独楽を題材とした実験を行い、形状などの違いによって回転継続時間に差がみられるかを検証した。

独楽の設計条件は、材料にボール紙を用い、その総面積は $49,000\pi\text{ mm}^2$  (直径70 mmの円板10枚相当) 以下となる円板形状の組み合わせであることとし、床から独楽底面までの距離を30 mmとした<sup>[2]</sup>。図4に製作した独楽の写真を示す。実験方法は、円板の上面に反射シールを2枚180°間隔で貼り、非接触式タコメータを用いて回転数が $N=600\text{ min}^{-1}$ に達した時刻より停止するまでの回転時間を調べた。



図4 製作した独楽

表2 独楽の回転継続時間, 総面積, 慣性モーメント

	回転継続時間[s]	総面積 [mm <sup>2</sup> ]	慣性モーメント [kg・mm]
独楽1	22	38,500π	397.92983
独楽2	31	38,500π	397.92983
独楽3	42	48,825π	624.70668
独楽4	62	49,000π	664.03954
独楽5	39	46,000π	627.79229
独楽6	47	47,800π	453.48890
独楽7	98	41,700π	763.28921
独楽8	125	48,900π	913.45537

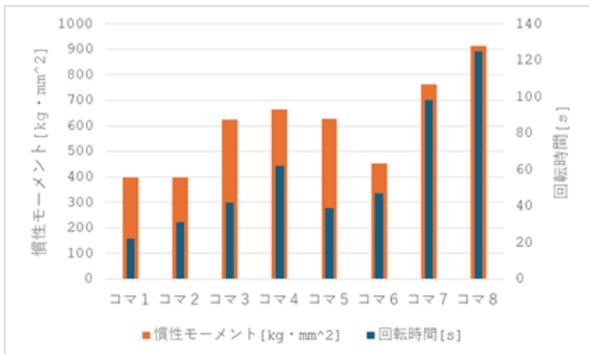


図5 回転時間と慣性モーメントの関係

#### 2-4. 独楽による実験結果および考察

表2 および図5は, 製作した形状の異なる8つの独楽の回転時間, 総面積, 計算した慣性モーメントを示す. 総面積がほぼ同じ値でも, 回転継続時間が長い独楽は慣性モーメントが大きい値を示す相関性があり, この値を利用することによりエネルギーを多く蓄える独楽が設計できると考えられることを受講生と確認した.

#### 3. 3Dプリンタを用いて作製した樹脂性試験片の衝撃試験

近年, 3Dプリンタを用いて様々な材質や形状のものが作れるようになった. しかしながら, 3Dプリンタでの成形時各種条件(充填率, 積層ピッチ, 材質, 積層方向, シェルカウント, 成形方法等)により強度に影響が出るが, その詳細については明らかになっていない. そこで, 本実験では積層ピッチ, 材質, 積層方向, シェルカウントおよび成形方法の異なる試験片を3Dプリンタによって製作し, 衝撃試験を行うことで, 各種条件による耐衝撃性への影響を調査した. 本研究テーマは2025年度に受講生が主体となり実施された.

##### 3-1. 実験方法

本実験では, 図6に示すシャルピー衝撃試験機(安田精機製作所 No.141)を用いて試験を行った<sup>3)</sup>. 試験片にハ

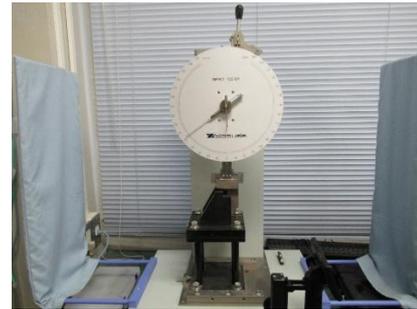
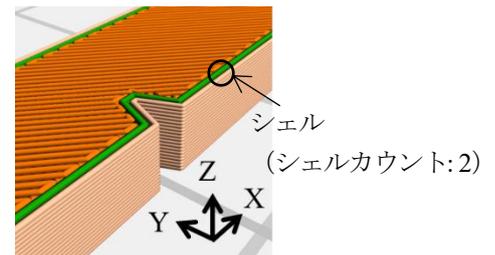
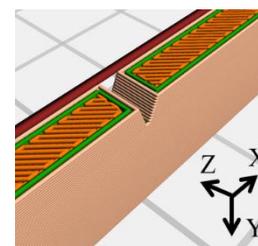


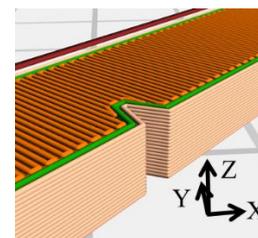
図6 シャルピー衝撃試験機



(a) 積層方向 X0°, Y0°, Z0° (条件1, 3)



(b) 積層方向 X90°, Y0°, Z0° (条件5)



(c) 積層方向 X0°, Y0°, Z45° (条件6)

図7 3Dプリンタによる試験片の積層方向

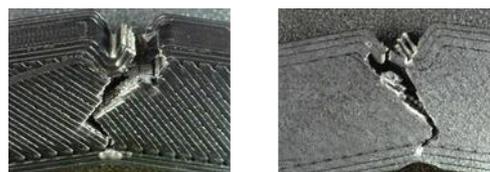
ンマーで衝撃を与え, その吸収エネルギーを測定し, 試験片の衝撃耐久性やじん性を確認した. なお, シャルピー衝撃試験値はその値が大きいほどじん性が高い(粘り強い)といえる.

試験片の設計, 製作には3D-CAD (SolidWorks) および3Dプリンタ (FLASHFORGE Adventurer 4) を使用した. 図7(a)に示す X0°, Y0°, Z0°の条件1 および3 を標準形

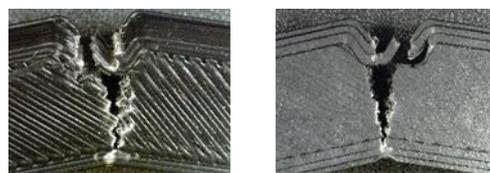
としており、シェル内部の積層方向は試験片の 3D-CAD モデル上面 (図では X-Y 面) に対して X 軸を 0°基準として Z 軸回りに-45°および 45°方向で交互に積層される。そのため、積層方向の条件を変更するため、図 7(b)の試験片では 3D-CAD モデルを X 軸に対して 90°回転させた方向 (X90°, Y 0°, Z0°) で、図 7(c)では Z 軸に対して 45°回転させた方向 (X0°, Y0°, Z45°) でプリントし、3つの異なる条件について検討している。充填率は 100%とした。受講生らは、各種条件に対して 3~5 回の試験を分担して行い、ハンマーの振り上がり角度を測定および記録し、シャルピー衝撃試験値を計算した上で考察を行った。なお、実験値はその平均値として算出している。

### 3-2. 実験結果および考察

表 3 に各種条件において得られた実験値を示す。材質および積層ピッチによる影響については、材質が PLA および ABS で積層ピッチが 0.2, 0.4 mm の条件 1~4 を比較すると、ABS の方が PLA よりもシャルピー衝撃試験値が大きい値を示している。また、いずれの材質でも 0.4 mm でシャルピー衝撃試験値が大きい値を示しており、積層ピッチは大きい程、耐衝撃性が得られている。破断部の様子を詳細に調査するため、シャルピー衝撃試験機で試験片に与える衝撃力を小さく調節し、ABS 製試験片における破断初期と破断途中の様子を観察した。図 8 は条件 3 および 4 の破断部の様子を示す。図より、条件 3 では始めは層の向きに沿って亀裂が入り、途中から下面の層の向きに沿って、破断しているが、条件 4 では始めは上面の層の向きに沿って亀裂が入り、途中からは小さなジグザグでほぼまっすぐ破断している。3D プリンタで製作した試験片は、層と層の継ぎ目が一番弱く、そこが破断の原



(a) 条件 3 (左: 上面, 右: 下面)



(b) 条件 4 (左: 上面, 右: 下面)

図 8 積層ピッチの異なる試験片破断部

因になりやすい。このことから、全体の強度は「継ぎ目の接合の強さ」が影響すると考えられる。今回の実験で、層を厚く設定した条件 3 は、薄く設定した条件 4 に比べて、造形にかかる時間が長かった。条件 3 では 1 層重ねるのに時間がかかるため、樹脂の温度が下がり、樹脂同士が十分に溶け合わず、継ぎ目の接合力が弱くなったと考えられる。

積層方向による影響については、材質が ABS の条件 3 の X0°, 条件 5 の Z45°, 条件 6 の X90°を比較すると、条件 5 のシャルピー衝撃試験値が 14.765 kJ/m<sup>2</sup> と最も大きい値を示している。図 9 に破断部の様子を示すが、条件 3 および 6 と比較して条件 5 では、積層が Y 軸に沿った方向で行われており、X-Y 面に平行な断面に衝撃力の作用するハンマーの進行方向と垂直な層を有していることが理由として考えられる。また、条件 3 および 6 を比較した場合には、後者が X-Y 面に平行な断面に衝撃力の作用する方向と垂直な層を有していることが理由でシャルピー衝撃試験値が大きい値を示していると考えられる。

表 3 各種条件におけるシャルピー衝撃試験値

条件	材質	積層ピッチ [mm]	シェルカウント	積層方向	シャルピー衝撃試験値 [kJ/m <sup>2</sup> ]
1	PLA	0.2	2	X 0°	5.990
2	PLA	0.4	2	X 0°	7.372
3	ABS	0.2	2	X 0°	10.044
4	ABS	0.4	2	X 0°	12.216
5	ABS	0.2	2	X90°	14.765
6	ABS	0.2	2	Z45°	13.122
7	ABS	0.2	4	X 0°	16.169
8	ABS	-	-	-	7.765



(a) 条件 3

(b) 条件 5



(c) 条件 6

図 9 積層方向の異なる試験片破断部

シェルカウントによる影響については、条件3および7を比較すると、後者のシェルカウント4の条件で耐衝撃性を得られることが示されている。さらに、条件7のシャルピー衝撃試験値は16.169 kJ/m<sup>2</sup>と全条件において最大の値が得られた。

成形方法による影響については、3Dプリンタで製作した条件3と、ABSの板材から切り出して製作された条件8の試験片を比較すると、条件3でシャルピー衝撃試験値が大きい値を示している。これは、条件8に対して条件3では、3Dプリンタで積層された各層とその間にできた空隙が衝撃力を吸収したと考えられ、優位性を示していると考えられる。しかしながら、条件8と比較して3Dプリンタで製作した条件1～7の試験片は、プリントのために設計した3D-CADモデルに対して精度が悪く、特に試験片特有のV型の切り欠き部で寸法の誤差が生じやすいデメリットがみられた。

#### 4. おわりに

本校で実施されている「ジュニアドクター育成塾」の取り組みのうち、2024～2025年度に第二段階で実施されたテーマの「永久機関に関する研究」ならびに「3Dプリンタを用いて製作した樹脂性試験片の衝撃試験」についての実施内容および成果について報告をした。「永久機関に関する研究」に関しては、受講生がジュニアドクター育成塾を修了後に本校へ入学したため、外部発表の機会を設けて「第31回日本高専学会年会講演会」のポスター発表

にて報告をしている<sup>4)</sup>。修了後に研究活動を継続する試みは本取り組みではこれまでに無く、今後もできる限り機会を見つけて活動の場を創り出せればと考えている。一方、「3Dプリンタを用いて製作した樹脂性試験片の衝撃試験」に関しては、次年度以降も在籍予定の受講生による「令和7年度ジュニアリサーチセッション」での口頭発表が予定されている。今後もさらに受講生による成果発表の機会を見出し、増やしていくことを課題とし、都市部と地方の教育や研究における格差の解消にも貢献していきたい。また、受講生が取り組んでみたいと考えるテーマや実施内容に対するマッチングも充実させていきたい。

#### 参考文献

- [1] 櫻間 他, 米子高専におけるジュニアドクター育成塾の実施報告, pp.54-60, 米子高専研究報告第59号, 2024.
- [2] 岩部洋育, 藤田剛, 他: 独楽作りを通じた慣性モーメントの学習, pp.704-705, 工学教育研究講演会講演論文集, 2013.
- [3] JISK7111-1, プラスチック—シャルピー衝撃特性の求め方 第1部: 非計装化衝撃試験
- [4] 岩倉 他, 永久機関を実現するために (米子高専ジュニアドクター育成塾での研究活動報告), 第31回日本高専学会年会講演会, PM-10, 2025.

# 【翻刻】『類題稻葉集』恋部

\*渡邊 健

## 概要

【翻刻】『類題稻葉集』序・春部（『米子工業高等専門学校研究報告』第五六号、令和三年三月）、「同・夏部」同第五七号、令和四年三月、「同・秋部」同第五八号、令和五年三月、「同・冬部」同第五九号、令和六年三月）に引き続き、『類題稻葉集』恋部二三三首を翻刻・紹介する。

## 凡例

- 一 底本には、国文学研究資料館所蔵『稻葉和歌集』下巻（松野陽一文庫、54-48-2）を用いた。
- 二 翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。
  - 1 歌頭に算用数字で和歌の通し番号を付した。
  - 2 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した（例 原文「立そむる」↓翻刻本文「立ちそむる」）。
  - 3 仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「(ママ)」と傍記した。
  - 4 漢字の表記は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（嶋・浪・湊などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。
  - 5 読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（ ）を付し、平仮名で読みを施した。
- 三 本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻の掲載をご許可いただいた国文学研究資料館に深謝申し上げます。  
なお本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「近世後期の鳥取の和歌における国学者の役割と地域歌壇の展開についての新考察」課題番号24K03651（代表・渡邊健）、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎研究と公開方法の開発に関するプロジェクト」（二〇二五〜二〇二七年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。
- 6 繰り返し記号「ㄣ」「ㄣ」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ㄣ」「ㄣ」で表記した。
- 7 合字「ㄣ」「ㄣ」は、それぞれ「ㄣ」「ㄣ」に改めた。
- 8 翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。序文や詞書等の文章には句読点・鉤括弧等を付し、改行は私意で改めた。
- 9 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。底本の誤脱と思われる箇所については、稿末の【翻刻付記】に私見による改訂案をまとめて記している。
- 10 丁付は、各丁片面の終わりに「」を付し、その下の括弧内に丁数と表裏（オ・ウ）を記した。

【翻刻】『類題稻葉集』恋部

潮

稻葉和歌集下巻

恋部

恋

1519 わが恋はいはまにむせぶ山清水せかれてのみも年をふるかな

よみ人しらず

1520 難波人みつとばかりに芦かびのもゆるは下のおもひなりけり

久鎮

1521 こもりぬの底のいくかのうきにのみ埋るとだにもいかで知らせん

安歎

1522 消えもせて年をつむかな藻汐木のからき思ひにみをこがしつゝ

永寛

1523 何となきうき世がたりも此頃は心の鬼にとがめられつゝ

治堅

1524 賤のをが春の野のべにやく草のしばくもゆる我がおもひかな

守雄

1525 あらし吹く空にうきたつ浮雲のみだれがちなる恋もするかな

民子

1526 逢ふことのかた山里にたくほたのひとりこがれてもの思へとや

知足

1527 水たまる池に生ひそふ浮草のよるべもとむる恋もするかな

宥看  
「(一才)

1528 恋せじと思ひし今朝のこゝろにもおもてぶせなる此の夕べかな

保合

1529 稲妻の光りにみゆるさゝがにのいとはかなる恋もするかな

隆磨

1530 うきをしる袖のうへなるしら露はまだき秋より置かぬ日ぞなき

初恋

1531 くれなゐの初花摺の恋衣人こそしらね下のみだれを

安歎

1532 露ならぬ心を人に置きそめてしのびくぬらす袖かな

弘範

1533 あだにちる行へはしらで恋草の露つみそむる袖の上かな

誠胤

1534 春ふかき露にしをるゝ山吹の色なる恋も我はする哉

広滋

1535 かくてしも何しのぶらんひとりのみぬれてかひなき袖の涙を

季世子

1536 もらさじと思ふものからおもふともこふともいかで人に知られん

むら岡

1537 水底に生ふる玉藻の打ちなびき乱ると人にしられずもがな

函

1538 しのぶ山忍ぶ心の奥ふかみ思ひいれども知る人のなき

久保道光

1539 つゝみてもあまる袂のしら露をよそにちらすな有明の月

真琴

1540 もらさじとしのびにしのぶ我が袖に心ともなく落つるなみだか

いく子

1541 水無瀬川ありて行く水下にのみ絶えずかよはん道せくなゆめ

正実

1542 なみだ川しら浪高く成けり袖のつゝみもいかゞ守らん

長秋

1543 よそにのみ見てやしのばん忍ぶ山たえぬ心の奥のしら雲

安歎

1544 もろともに心にうゝる忍草末葉の風に露もちらすな

有信

1545 たらちねの親のいさむる朝いのみ心にかゝるよはにも有るかな

周道

- 1546 恋すれば心よわくぞ成りにける風の音にもいねがてにして 信英
- 1547 不言恋  
思ふこといはまの水のいはしたゞもれなば音に立ちもこそすれ  
治堅  
鳳鳴  
「(二才)
- 1548 山ぶきの花をかざしの岩清水落つる雫も音にたてめや  
鳳鳴  
「(二才)
- 1549 難忍恋  
あくがれて妻どふ猫のしのび侘び音になく恋も我はするかな 晋  
かくれ妻  
かぜたゞば心あらなん女郎花霧のまがきはくづれもぞする 惟成  
不頭恋  
蛙なく細谷川の岩がくれかくれて生ふる恋草ぞうき 広滋  
見恋  
垣間見は人にしれじと山吹のいはぬ色をもたのみける哉 隆磨  
通書恋  
かきやりしかひもなにはのうらみては筆のとがとも思ひけるかな 香  
1554 年月のつれなかりける恨みさへとけてうれしきけふの玉章 孝子  
初言出恋  
はづかしの杜の木陰にほとゞぎすもらす初音もいかゞきかれん 清村  
1555 頭恋  
もらさじとつゝむ涙のなか／＼にあと頭はるゝ恋衣かな 淇園  
有明のつれなきほどにわかれこし夜戸出の姿誰かみつらん 安歡  
名立恋  
1558 身におへる我がうき名こそ車にも舩にもあまる重荷なりけれ 光郷
- 1559 尋恋  
笛の音にしらべあはするふしなくは何をかごとに尋ねよらまし 有信  
「(二ウ)
- 1560 隔人目恋  
ふせ竹のかよりあひても白真弓つらき隔てのある世なりけり 治堅
- 1561 久恋  
いつまでかうき年はへん片糸のあはぬ思ひにむすぼれつゝ 柴田英純  
生きてよも明日まで人はと思ひしはつらき命の昔なりけり 安歡  
恋ひわびてうきのみ積もる年月をあはれいつまでながらへてみん 愛淵義一  
1562 さりとともと思ふたのみを玉の緒にかけてつれなき世にもふる哉 直規  
1563 経年恋  
いくとせのまつにつれなくしぐれつゝそめぬ袂の色に出づらん 清水貞固  
1564 祈恋  
袖の露かゝれとてしも祈らぬをあな心なの杜のしづくや 広滋  
神垣にかけしめはくづるともたのむ心はよわりしもせじ 祐之  
1565 ゆふだすきかけししるしも見えぬなくなるよ■には祈らぬ物を 知雄  
玉の緒よ絶えばたえねのねがひだにうけひし神も今はなしやは 淇園  
1566 祈逢恋  
1567 1568 1569

1570 あへばまた逢はまほしさの増さるかなひとよばかりと何いのりけん

晋

「(三才)

祈絶恋

1571 貴船川あふせはたえつみしめ縄かゝれとてしも祈りやはせし

里登女

不逢恋

1572 たのめつゝ池のぬなわのぬるよなみうきにたゞよふ我が心かな

保合

1573 つれなさの袖に玉ちる朝ぼらけ別れてなげく涙ともがな

武義

契恋

1574 わすれじの其のちかごとや有りて世の相思ふ中のしるべならまし

義信

待恋

1575 かへしても今ぞねばやの衣手に何かたるらんさゝがにのいと

治堅

1576 思ふ人こぬ物ゆゑに音づれて又おどろかす軒の松かぜ

木下芳安

1577 待つ人は空にすむともきかなくに何夕雲のながめらるらん

鳳鳴

1578 さゝがにの糸を心のゆふけにて待つ夜はをすもかゝげざりけり

武彦

1579 契りつるそのことの葉は色かへてまつを常盤の宿の夕暮

信庸

1580 閨ちかく妻こひ侘びてなく猫のおなじ思ひに夜は更けにけり

茂信

待空恋

1581 今はとて人の別るゝ鳥がねをひとり聞きてや夜は明さまし

1582 有明の月は落ちくる閨のとを明けてかひなき夜ともしらずや

豊秋

「(三ウ)

逢恋

1583 あふ夜半は思ひの煙袖の露いつれかさきに消えんとすらん

秀子

1584 こよひしもあふ坂山のさねかつら長きうらみは散りはてにけり

久鎮

1585 あふよはのうれしき中になしきのそふは別れのおもひ也けり

則行

深夜逢恋

1586 人しれぬ我があふ坂をたどるまに鳥なきぬべく成りにけるかな

広滋

夢逢恋

1587 うちとけて見しよの夢の別れにも猶うらめしき暁のかね

1588 逢ひみてし夢ぢは露も知らざりし何にね覚めの袖しめるらん 則行

逢無実恋

1589 あふ坂はよはにこえてもかひぞなき鳥のそらねを我がうへにして

武彦

乍臥無実恋

1590 逢ふよはも中の衣を隔てにて重ぬるものはうらみ也けり

治堅

1591 打ちなびきふすとはすれどなよ竹の猶下をれぬ君にも有るかな

信英

逢不遇恋

1592 かりがねの鳴くにわかれし暁は又来ん秋と契り置きしを

茂雄

1593 あふことのうれしきほどに絶えざりし玉のをさへぞ悔しかりける  
「(四才)  
弘範

別恋

1594 うれしさにほしゝひとよの袖の露有りしにかへる別れ路の空 晋

1595 人しれずわかれし袖の移り香をつゝむとすれば朝風ぞ吹く 守雄

1596 待ちこひし夜頃の袖はほしゝかど中ゝなりや別れ路の露 英光

後朝恋

1597 身にそふも中ゝつらし有明の月に別れしけさの面かけ 貞固

1598 夢にだにあふ夜あらばと歎きこし心悔しき今朝にも有るかな 秀子

1599 わかれにしかたみの月も又さらにたもとはなれて影しらみつゝ  
貞之

疑恋

1600 東屋のまやのあまりにことよきも心の奥のうたがはれつゝ 安歡

恋非一

1601 梅がゝにそめし心のをくよりにまたもひかるゝ青柳の糸 則行

精進恋

1602 心からさえしいもゐにやつるゝも思ふねがひの有りにて也けり 安歡

依雨障恋

1603 まくなぎの■つく軒にうらぶれて身をしる雨を何に詠みけん 治堅  
「(四ウ)

旧恋

1604 くれ竹のそよとこたへし一言を思ふふしにて年も経にけり 俊民  
思

1605 世に出でぬおもひもくるしうつ石の中にのみして消えぬ物から

1606 ふかくのみ思ひたどりて染川のうきせばかりを恋ひやわたらん  
有恆  
季甫

片思

1607 千ゝにのみおもひみだれて片糸のあはぬ月日も我はへにけり ■■

変恋

1608 妻琴のよはのしらべの乱るゝやあはず成り行く始めなるらん 洪園

1609 侘ひぬればうれしかりつる言の葉も今はたうきにかぞへられつゝ 安歡

1610 ことの葉のうつろふみればいつしかと人のこゝろに秋風やふく 永寛

盗恋

1611 思ひあまり袖にたゝへし涙より世にしら波の名は流れけん 周道

不忘恋

1612 おもはぬを思ひそめつる余浪とて忘らるゝしも忘れかぬらん 治堅

欲名立恋

1613 恋ひわたる涙の川のせを早みはたや我が名もながれ出でなん 秀子

立無名恋

1614 うちなびきねもみぬものを浮草のうきたる名のみ世にながれつゝ 安歡

1615 夕はふる波にたゆたふ沖つものなびきねぬなも立ちにける哉  
「(五才)

1616 厭無名恋 治堅  
 人とはぬむぐらの宿にふる雪の役なき名のみ消えずも有るかな 信庸  
 1617 頸恋 重好  
 結ばれしおもひの氷とけしよりうきせあまたに波さわぐ也 重好  
 恨恋  
 1618 もしほくむ蟹ならなくにとばかりもうらみて袖のかはくまぞなき 仲子  
 1619 おもかげのわすれがたき心にて何にうらみのかつ積もるらん 宣雄  
 絶恋  
 1620 人目のみよきてとはぬと思ひしも終に絶えぬる中と成りにき 永寛  
 1621 恨みわびおもひかへせど役もなしわかれし空や夢の浮橋 豊秋  
 1622 終にかくせ絶えみえ行く夏川の浅き心を何たのみけん 宜行  
 絶後頸恋  
 1623 今更にいかでうき名の立田山もみぢの秋は昔なりしを 盛平  
 等思兩人  
 1624 ゐ杭つくまた江の水の二筋に思ひたゆたふ恋もするかな 治堅  
 1625 明けていはんすべこそなけれ玉くしげ二かたによる心づくしを 則行  
 恋貴人 一(五ウ)  
 1626 を山田の麦生のひばりそれだにも思ひあがりてねは鳴かぬなり 清村  
 1627 久かたの雲の月をこふるにも玉章かけて雁やたのまん 知彰

1628 近不逢恋 潮  
 おなじ野にすむを契りの友鶉ともなきにせぬ夕ぐれぞなき 潮  
 隔恋  
 1629 絶えやらぬ恋の山ぢのいつまでかなれはまさらで中隔つらん 茂雄  
 思出恋  
 1630 なか／＼につれなき人のいつはりをたのみし世こそ恋しかりけれ 永寛  
 1631 暁恋 知足  
 別るべき暁ちかく成りぬめり妹とふすまのうへぞ露けき  
 暁の鳥の八声はつくしても明けぬや恋の関路なるらん 知足  
 夕恋  
 1632 にしき木もけふを限りの夕まぐれかぞへ尽くしつ入逢の鐘 円可  
 1633 夜恋  
 うつゝにも夢にも人をみることは思ふに上のたのみこそあれ 安歎  
 1634 人待つとさらぬ板戸にさす月の面はつかしきよはのはしりや 宣甫  
 1635 恋心  
 今はたゞ物のあはれを是よりと思ひもいれぬほどぞ恋しき 安歎  
 1636 恋命 一(六オ)  
 ありてこそめぐりもあはめ玉の緒にかへてとまでは何歎くらん 武義  
 1637 恋ひしねと思ふ命もつれなくて猶ぞ恨みのかずをそへける 三蔭  
 1638 たのむかなつらさにたへぬ玉の緒もあらばあふよと思ひよわらで

- 1640 恋すてふ心にそむく涙かなとすれば袖の外にあまりて 正純 政忠
- 1641 せきかへす涙のはてをいかにせんおさふる袖の色に出でなば 季世子
- 1642 恋ひわびて見るとはなしに見る夢は夢としもなき物にぞ有りける 潮
- 1643 夕けとふ道のほとりに散る花の移ろふ色ぞかつははかなき 茂信
- 1644 するらめやをすの外面にさく梅のかばかりふかく思ひしむとは 木下宗賀
- 1645 うち霞みふるとも見えずふる雨にぬれねどぬるゝ我が袂かな 賤子
- 1646 侘びぬれば心も空に結ばゝれあそべる糸のよるかたもなし 潮
- 1647 此の頃はわが恋草もしげるめりすゞしきかぜのうとく成りぬる 周道
- 1648 思ひ川水のみまさるさみだれにわたるせのなき恋もするかな 定庸
- 1649 はつか草はつかにのみは契らじをいつかあやめのねに習ひけん 重尚
- 1650 来んゆかんかたみにまつの下清水結びあかしゝよはも有りけり 潮
- 1651 みな月の照る日もしらぬおもひ川絶えぬなみだや淵となるらん 春房
- 1652 秋の野のちぐさに昼は物を思ひくるれば虫の音にのみぞなく 秋恋 淇園
- 1653 今はたゞ我が身のよその秋ながら更になしき虫の声かな 秀保
- 1654 はた薄ほに出でてまねくかひもなし人の心の秋更けしより 民子
- 1655 思ふことやしほにそむる紅葉の色に出でてや人にしられん 賤子
- 1656 うき人の心に生ふるねなし草秋の末にもかれずぞ有りける 政芳
- 1657 冬恋 茂以
- 1658 あやなくもへだつ心か朝水とけなば残るくまもあらじを 知良
- 1659 さゝ枕ひとよばかりのかりねにも身にしむふしは有る世なりけり 旅衣 惟憲
- 1660 おもふ人の遠きわたりに物しけるに 治堅
- 1661 終に行く道には我ぞさきだゝんひとりおくれ恋ふらくはうし 恋燈
- 1662 などもかく消えせで物は思ふらん身はともし火のかげとなしつゝ 是満
- 1663 恋天象 永寛
- 1664 物思ふとながめにかゝる浮雲の袖よりそゝぐ月の落水 潮
- 1665 うき人の心にたちし秋風はうはの空より明けはじめけん 寄雲恋
- 1666 うき雲もしぐるゝ袖のゆかりとや物思ふ頃はながめらるらん

1677 たのまれぬ人の心の村しぐれまた誰が袖の色は染むらむ 道光  
 1676 つぶ／＼とはれぬ小雨に物ぞ思ふ心の花も夕じめりして 周道  
 寄春雨恋  
 1675 かりそめのうきたる雲と契りしや身をしる雨の始めなりけん 信英  
 1674 誰がかたに晴れぬる雨のなごりとてわがまつ山はかきくらすらん 広滋  
 1673 うれしくも降りくる雨か妹が門さしてはとほんよしもあらなくに  
 誰がかたに晴れぬる雨のなごりとてわがまつ山はかきくらすらん  
 寄雨恋  
 1672 ふくかぜのうはの空なるたよりだにあらばあふよのたのみならま 治堅  
 1671 恨みわび思ひ絶えぬる手枕に何かよらん松かぜの声 守雄  
 1670 天つ空心もなくて吹くかぜにかつみぬ人の恋しきやなぞ 淇園  
 1669 かきくらす袖のしぐれと成りにけりみはてぬ夢の末の松かぜ 茂信  
 寄風恋  
 1668 照る月もかきけつばかりおほけなく思ひあがれる恋もする哉 春彦  
 1667 袖のうへに身をしる雨のそぼつとも知らずがほなる月も恨めし 守前  
 1666 あだにちる露のひかりと成りにけりみし世やいづら浅ぢふの月 茂信  
 1665 わが袖に夜がれぬ月の影ばかりうつろふ人の心にも似ぬ 祐之  
 寄月恋  
 安歎

1689 山川の落葉がくれを行く水のいつかあふせにめぐり出るし 鳳鳴  
 1688 末終に淵とやならん涙川袖のしづくを水上にして 武成  
 寄水恋  
 1687 あふせにはめぐりもあはで泉川いつまで袖に波はかくらん 直規  
 1686 もらさじと思ひの外のおもひ川かへらぬ名のみ世にながしつゝ 賤子  
 1685 人ごころへだつる恋の山路には何をしをりにたどりいらまし 宣雄  
 1684 浅間山あさまに人をみてしより思ひのけぶりたゝぬ日もなし 永寛  
 1683 来ぬ人を待ちかね山の青つゞらくるしやまつにかゝりのみして 有信  
 1682 寄山恋  
 1681 末終にいはぬ思ひに消えぬともむねの煙は外になびかじ 英光  
 1680 寄蚊遣恋  
 1679 末遠くこめし契りも春霞ほのかにのみやならんとすらん 萬瑞  
 1678 雪こそは春日きゆらめ我がこふるおもひよ君にあはれいつまで 志哥子  
 寄雪恋  
 1680 なびきあふ末をたのみの烟さへとすれば風に吹きけたれつゝ 義信  
 寄煙恋  
 1679 末遠くこめし契りも春霞ほのかにのみやならんとすらん 萬瑞  
 1678 雪こそは春日きゆらめ我がこふるおもひよ君にあはれいつまで 志哥子  
 寄雪恋  
 「(七ウ)  
 「(八才)

- 1690 ともすればせかれてよどむ遣水のやるかたもなき我が思ひかな  
千世子  
一(八ウ)
- 1691 人しらぬ木の下かげのうもれ水恋しき月のやどるよもなし 寿子  
一(八ウ)
- 1692 寄瀧恋  
落ちたぎつ瀧のしら玉袖の上につゝみ多てしもなげく頃かな  
季甫
- 1693 寄井恋  
くみてしれことに出でてはいはかねの筒井の水のむせぶ心を  
長秋
- 1694 寄橋恋  
はし柱たつ名ばかりは朽ちもせでむかしながらにわたる世ぞなき  
治堅
- 1695 寄湊恋  
ことのはをかけた湊の海人小舟くるゝになどか入りしほのなき  
有信
- 1696 寄淵恋  
いへばえに淵のいはがきみがくれて思ひしづむと知る人もなし  
文英
- 1697 寄浦恋  
波あるゝ浦の蟹舟こぎいでゝみるめかるべくいつか成りなん  
永寛
- 1698 いたづらに松帆のうらのあま衣ぬれのみぬれてほすよはもなし  
晋
- 1699 寄関恋  
はるかなる我があふ坂をいかにせんいとふ人目の関もある世に  
英光
- 1700 寄名所恋  
津の国のなにはのさきのならび浜いや二ならびねんよしもがな  
古蔭
- 1701 寄木恋  
花ならばあはれと人のとひもこんしるしの杉よ植ゑかへてまし  
茂信  
一(九才)
- 1702 晋  
あだにのみけふもながめてくらしけり空しき門のまつは何にて
- 1703 寄梶恋  
空にのみたつ名おもへば口なしの花のまがきもたのみなの世や  
政芳
- 1704 寄柳恋  
さそふ風有りとはなしに青柳の片なびきするわが思ひ哉  
鳳鳴
- 1705 寄棟恋  
妹とわがあひにあふちの時過ぎてうすく成り行く恋心かな  
重好
- 1706 寄紅葉恋  
いかにせん秋の木葉の色／＼に人のこゝろは移りのみして  
孝子
- 1707 寄竹恋  
引きみても人の心のふし多みおもひのたけはつくし兼ねつゝ  
信英
- 1708 寄草恋  
年も経ぬ軒ばの草の名をかりて色に出でじとつゝむ思ひも  
繁長
- 1709 晋  
かにかくにねざし定めぬ浮草のうきて物思ふ我にも有るかな  
潮
- 1710 寄夏草恋  
今は只よるべさだめぬ水隠れの波のうき草ねになかれつゝ  
永寛
- 1711 晋  
いつしかとかよひし駒の跡絶えて夜がれみえ行く庭の夏草

- 1712 今はそのかげだにみずのあふ草かけじや何の行く末の空 正甫  
寄葵恋 志満子  
「(九ウ)
- 1713 かくれぬにひくやあやめのねもみぬにあやなく袖の露けきやなど 是満  
寄菖蒲恋  
「(十オ)
- 1714 かぜふけばなびくすゝきの寐ておもひ起きては袖の露こぼしつゝ 保合  
寄芭恋
- 1715 いたづらに待ちあかしては音をぞなくかけのたれをの長くしよ 正甫  
を  
寄鳥恋
- 1716 ながめやれそなたの空を郭公こひしとなくも恋しかりけり 清村  
寄雁恋
- 1717 物おもふ頃しも雁の鳴きてこしその夕ぐれぞ更に恋しき 秀保  
寄鶯恋
- 1718 きぬぐの心もしらでをすのとに人くといとふ鳥も有りけり 季尚  
寄千鳥恋
- 1719 かくばかり音のみはなかし思ひ川かよふちどりの跡をだにみば 治堅  
寄燕恋
- 1720 ちかごとも今はかひなき中垣のかなたにのみもとぶ燕かな 古樹  
寄虫恋
- 1721 おぼつかな親のかふこの眉ごもりその糸ぐちを誰かひくらん 治堅
- 1722 契り置きしころのまつの木の間よりきくも嬉しき日ぐらしの声 茂之  
契り置きしころのまつの木の間よりきくも嬉しき日ぐらしの声
- 1723 待つよひの友と留めつる秋のむし音になくまではいつ習ひけん 守雄  
寄螢恋  
「(十オ)
- 1724 集めても学ばざりしを螢よりまさる思ひといつ成りにけん 道久  
寄螢恋
- 1725 物思ひに昼はけなまし夏虫のかげと我がみの成りなましかば 広滋  
寄蛙恋
- 1726 つゝみるの底のかはづの口ごもりにむせぶも何の思ひとかきく 函  
寄獸恋
- 1727 恋すればはかなき猫の綱手にもかげまつはるゝえにぞ引きける 安歎  
寄獸恋
- 1728 音のみなく秋のをじかの妻ごひにたぐふ我が身といつ成りにけん 治久  
寄玉恋
- 1729 人しれず恋ふる涙を緒にぬかばいくらの玉の数にかあらまし 有信  
寄鏡恋
- 1730 何にかく思ふおもひのます鏡影だに人の見えばこそあらめ 重稔  
寄鏡恋
- 1731 うつり行く人の心の朝かぐみなにおもかげのさしてみゆらむ 晋  
寄笛恋
- 1732 うきふしも心にこめて笛竹の音にはたてじ恋はしぬとも 村岡  
寄笛恋
- 1733 いづこにかしらべあふらん我が門はよそになり行く笛竹の声 村岡

1734 寄琴恋  
つれもなき中のひも緒に結ぼれ朽ち木のことのねのみなくかな  
永寛

福原喜尾子  
「(十一才)」

1735 寄筆恋  
あらはれたよりとしらで誓言をかきし筆さへ悔しかりける  
治久

1746 寄荷恋  
あふごなき恋の重荷は車にも舩にも更につまれざりけり  
政兼

1736 寄鐘恋  
待ちをしむころろくに聞きわけてとなりかくなる鐘の音かな  
安歎

1747 寄鳴子恋  
人ごころ秋になるこの繩くちて引かばたゆべくなれる中かな  
豊秋

寄鐘恋

1748 寄軽業師恋  
思ひきやわたす小繩のひとすちに玉の緒かけて恋ひんものとは  
重好

1737 寄笠恋  
むら雨は笠にしのごてこしかども人のつらさに袖ぞ濡れぬる  
尊信

1749 寄催馬楽恋  
たか山に放ちあげたるあら驚のおくかもしらず恋ひわたるかな  
治堅

1738 寄衣恋  
あだ人のかひなでしこの夏衣なれば袖のぬれもこそすれ  
治堅

1750 おもかげは猶身をさらぬそひぶしにいくよかひとり夢かこつらん  
寿子

寄衣恋

1751 恋のうたの中に  
百千たびふみまよひたる後にこそまことの恋のみちはしらるれ  
淇園

1740 何しかも衣はそめんはねず色のうつろふものと兼ねて知りせば  
恆安

1742 歌 第三句「成けり」 「成にけり」の誤りか。  
1743 歌 第三句「紅葉の」 「紅葉の」の誤りか。  
1744 歌 第五句「めぐり出るし」 「めぐり出らん」の誤りか。

1741 今のはやしのお心もつき弓のおしあらはしていひはなちてん  
寄車恋

1745 波ま分け漕ぎ行く舟に風たゞでひくしほもなき恋のみちかな  
本龍

寄弓恋

1746 寄船恋  
わが恋は霞がくれを行く舟の思はぬかたに頭はれにけり  
本龍

寄車恋

1747 人目も恋の重荷の七ぐるま玉の緒かけて引くべかりける  
周道

1743 とし月に思ひをつみて小車の引くにひかれぬ我がこひぢかな  
衝

寄船恋

1744 わが恋は霞がくれを行く舟の思はぬかたに頭はれにけり  
本龍

1745 波ま分け漕ぎ行く舟に風たゞでひくしほもなき恋のみちかな  
本龍

【翻刻付記】

1542 歌 第三句「成けり」 「成にけり」の誤りか。  
1655 歌 第三句「紅葉の」 「紅葉の」の誤りか。  
1689 歌 第五句「めぐり出るし」 「めぐり出らん」の誤りか。

\* 原稿受理 令和八年三月五日  
\*\* 教養教育部門